

第2回 鳥取大学地域学研究大会

講演・シンポジウム「地域学への期待と課題」

- 【主催】 鳥取大学地域学部地域学研究会
【会場】 鳥取大学全学共通棟A20教室
【日時】 2011年12月10日（土）午後13:30～18:30
【内容】 開会挨拶:安藤由和（地域学研究会会長/鳥取大学地域学部長）

基調講演:中村浩二（金沢大学教授/学長補佐（社会貢献担当））
「地域の課題に向き合う研究と人材養成
ー＜能登里山マイスター＞養成プログラムから」

栗原 彬（立教大学名誉教授/立命館大学特別招聘教授
/日本ボランティア学会代表）
「地域におけるボランティアな生き方ー地域学への期待」

シンポジウム

コーディネーター:家中 茂（鳥取大学地域学部地域政策学科准教授）
パネリスト:仲野 誠（鳥取大学地域学部地域政策学科准教授）
児島 明（鳥取大学地域学部地域教育学科准教授）
永松 大（鳥取大学地域学部地域環境学科准教授）
柳原邦光（鳥取大学地域学部地域文化学科教授/
地域学研究会副会長）

閉会挨拶:藤井 正（地域学研究会副会長/地域学部地域政策学科教授）
司 会:福田恵子（鳥取大学地域学部地域教育学科准教授）

第2回 鳥取大学地域学研究大会

講演・シンポジウム「地域学への期待と課題」

The Second Annual Meeting of
the Tottori University Association for Regional Sciences:
Toward the further development of Regional Sciences

[第1部] 基調講演

中村浩二* 「地域の課題に向き合う研究と人材養成

—<能登里山マイスター>養成プログラムから」

NAKAMURA Koji*, Research and human resource development to address regional issues: a case study of training program: “Noto Satoyama Meister”

栗原 彬** 「地域におけるボランティアな生き方—地域学への期待」

KURIHARA Akira**, Approaches to voluntary life in the community: Expectations for the development of Regional Sciences

[第2部] ディスカッション

コーディネーター：家中 茂***

パネリスト：仲野 誠****・児島 明*****・永松 大*****・柳原邦光*****

開会挨拶：安藤由和*****

閉会挨拶：藤井 正*****

司 会：福田恵子*****

キーワード：地域学、里山、能登、ボランティア、エッジ

Key Words: Regional Sciences, SATOYAMA, NOTO Peninsula, voluntary, edge

*金沢大学教授／学長補佐（社会貢献担当）

**立教大学名誉教授／立命館大学特別招聘教授／日本ボランティア学会代表

***鳥取大学地域学部地域政策学科准教授

****鳥取大学地域学部地域政策学科准教授

*****鳥取大学地域学部地域教育学科准教授

*****鳥取大学地域学部地域環境学科准教授

*****地域学研究会副会長／鳥取大学地域学部地域文化学科教授

*****地域学研究会会長／鳥取大学地域学部地域環境学科教授

*****地域学研究会副会長／鳥取大学地域学部地域政策学科教授

*****鳥取大学地域学部地域教育学科准教授

第1部

■福田（司会） ただいまより第2回地域学研究大会を開催いたします。

皆様、本日は年末のお忙しい折に御出席賜りまして、まことにありがとうございます。本大会は、「地域学への期待と課題」をテーマといたしまして、お二人の先生をお招きして御講演とシンポジウムを予定しております。

私は、本日の司会を務めさせていただきます鳥取大学地域学部の福田恵子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手） それでは、開会に当たりまして、安藤由和地域学研究会会長より御挨拶を申し上げます。

■安藤 皆様、こんにちは。地域学部学部長の安藤と申します。

開会挨拶

本日はお寒い中、また休日にもかかわらず御来場いただきましてありがとうございます。また、今日の講演者でありますお二方の先生には、本当に遠路はるばるおいでいただき、感謝申し上げます。

この地域学研究大会は第2回目ということですが、この地域学研究会というのは地域学部と連動しておりまして、地域学部の方は平成16年に教育地域科学部から改組して、今年で8年目ということになっております。この大会は2年目ということで、昨年第1回の大会を開催しております。

昨年は、この地域学部の外部評価を受けるという意味合いもありまして、昨年から開催しておりますけれども、当初地域学部は8年前の話ですが、できた当初は、これは海のものか山のものかという感じで、何をやるどころかという評価だったと思います。今年はその評価から少しはよくなってきて、世間的にといいますか、全国的に認知されてきているという気持ちを持っております。それは、私は今年から地域学部長ということで、いろいろと全国の関連の大学の協議会などに出ておりますと、やはり地域学ということで真っ先に鳥取大学の名前が出てくるということでも、知れ渡ってきているのだと思っております。

ですが、去年の外部評価を受けたときの話ですが、地域学部の学生の養成の目標というのが、地域のキーパーソンを養成するという大テーマを掲げておりまして、今年で卒業生を送り出して4回目ということで、本当にキーパーソンを育てて送り出しているかというところで、昨年、少し評価の面で検証が必要だという示唆を受けております。そういう意味で、今回2回目の研究大会、横に講演者のテーマが書かれておりますけれども、これからの地域学部の人材養成として、地域のキーパーソンをいかに養成できるかということにおいてヒントを得られるお話をお聞かせ願えるのではないかと思っております。

それから、また後半部分はパネルディスカッションということで、うちの学部の誇る4学科の教員がここに立ちまして、現在の地域学部の地域とのかかわりをそれぞれの専門の立場からお話、それから報告していただけるものと思っております。4学科というのは、教育、政策、環境、文化と、それぞれ専門が異なりますので、それぞれの異なった立場からの報告、それから私自身は物理ということで、またそういう方と違った観点で物を例えば見ているだろうと思います。ただ、地域学をつくるときに、いろんな立場の人がいろんな立場でおそらく関連していくと思いますので、立場の違う人々の意見をよく聞いて、これからの地域学部をつくり出していきたいと思っております。

この後、柳原先生の方から今回の大会の趣旨説明がございます。あまりしゃべっていると話がかぶってしまいますので、簡単ですが、この程度のお話で済ませたいと思いますが、今日、外の温度は非常に寒いということではありますが、少なくともこの会場の中だけでも熱い議論をしていただい

て、熱気でここの温度を上げていただきたいと願っております。大変簡単でございますけれども、開会に先立ちましてあいさつにかえたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

■福田(司会) 続きまして、柳原邦光地域学研究会副会長より、本大会の開催趣旨を御説明申し上げます。よろしく願いいたします。

■柳原 地域学研究会副会長の柳原と申します。これから大会の趣旨説明をさせていただきます。

趣旨説明

シンポジウムのタイトルは、後ろにありますように、「地域学への期待と課題」といたしました。私たちは4月に、この『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』という本を出版して、わたしたちの地域学を提示しましたので、これを機会に、地域学に期待されること、現時点での私たちの地域学の到達点を再確認するとともに、今後取り組むべき課題、領域を明らかにして、今後の方向性を確認したいと考えたからです。そのための前提作業として、これから『地域学入門』を出版するに至った経緯と、私たちの地域学がどのようなものを簡単に紹介させていただきます。

鳥取大学地域学部は創設以来、今年で8年目を迎えました。もともとは教育学部でしたが、1999年に教育地域科学部に改組され、2004年に現在の地域学部になりました。「地域」を冠する学部というのは、国立大学としては1997年に岐阜大学で地域科学部ができました。鳥取大学はそれに次いで2番目ということになります。教育地域科学部のときに地域への取り組みが始まったわけですが、やはり移行期ということがありまして、地域学を理論化する試みが実質的にスタートしたのは地域学部になってからです。

しかし、それは、私たち教員にとってみますと、ある意味で苦難の始まりでした。といいますのは、地域学というまとまった学問がありませんので、私たちが自分たちの手で一つ一つつくっていかねばならないという事情があったからです。そのために、私たちはなぜ地域なのか、地域学なのかという非常に素朴な問いから始めることにしました。地域学をつくるための場となったのが、3年生の必修科目である「地域学総説」という授業でした。この授業は今年で6年目を終えました。毎年、だいたい10名ぐらいの教員が、授業プランの作成からその実施、そして理論化の作業まで、長い時間をかけてやってきました。その努力の結晶が、今回出版しました『地域学入門』です。

地域学入門—〈つながり〉をとりもどす

この『地域学入門』のサブタイトル「〈つながり〉をとりもどす」に注目していただきたいと思います。といいますのは、これが先ほどの「なぜ地域なのか、地域学なのか」という問いの答えになるからです。私たちは、人として生きていくためには、さまざまなつながりとか関係といったものを必要としているのですが、今日ではそれを失ってしまった。つながりを取り戻して確かな関係を再構築することが自分たちの存在の確かさを感じて生きていくことになるのではないかと、生の充実や私の幸福、私たちの幸福に至る道筋ではないかと考えています。

つながりとか関係といいますと、真っ先に想起されるのが、やはり人と人との結びつきということですが、私たちが考えているのはそれだけではありません。人と自然との関係、人と土地との関係、過去や過去の人々との関係、風土とか歴史性と言うことができるかと思いますが、このほかにも労働だとか経済のあり方を含めて、さまざまなつながりや関係を視野に入れて考える必要があると思っています。

地域に着目したのは、つながりや関係が結ばれる場として、人が生きる場がまずは重要だと

考えたからです。地域とは何かと問われますと、答えるのは難しいのですが、自然環境や社会環境、人と人との結びつきの形を含めて、何らかのまとまりとありますか、個性を持った、明確な線引きのできない空間ではないかと考えております。

私たちは皆、地域で生まれ育って、地域に固有の考え方とか感じ方、それから振る舞い方や規範といったもの、要するに地域性と言っていいものをいつの間にか身につけております。もちろん人は移動する存在でもありますので、正確に言えば、さまざまな地域性が私たちの中には重層的に織り込まれているというべきかもしれません。

いずれにしても、生の充実や幸福を考えるときに、地域性を無視することはできないだろうと考えています。地域学では、この地域性を明らかにするとともに、それが私たちの暮らしと生にとってどんな意味を持っているのか、そうしたことを考えようとしています。地域が持っているきずなや支えとしての側面と同時に、人を制約する側面といったことも考えたいと思います。

地域学の立ち位置と目指すもの

『地域学入門』で最も重要な検討課題の一つになりましたのが、自分の立つべき位置はどこなのか、まなざしをどこに向けるべきなのかということでした。私たちが学んだのは、目を向けるべきは、まずは自分の足元である。そこからまなざしを広げて、さまざまなつながりや関係をとらえようということ。自分の足元、すなわち自分自身を、自分の育ってきたところを、自分の生活しているところをよく見て、そこを足場として生活する当事者として考えようということ。また同時に、生活の場を枠づけている大きな構造や関係性を客観的にとらえるというまなざしも欠かすことはできません。このような複眼的なまなざしを持って、地域学は人々の暮らしの場であるローカルな空間から国家を超える広域的な空間までも視野に入れて、地域性を尊重しつつ、誰もが人として生きやすい状態を考え、その実現を目指します。

地域学の目標は、生の充実や私の幸福、私たちの幸福の実現に寄与するということです。経済的な条件も含めて、人として安心して幸福に生きていくために必要な諸条件とは何か、それを実現するにはどのような方法があるのか。人と人との関係でいいますと、人と人が支え合う関係と、そのための場を発展させる条件と方法を考えるわけです。つまり、現実の地域とそれから望まれる地域といいますか、私たちがこうであってほしいと思う地域との間に隔たりがあるということを前提にしまして、この隔たりをできるだけ埋めていくことが地域学の目標です。この意味で、地域学は実践の学であると考えています。この場合の実践というのは、こうした過程における一人一人の内省から政策までを指しております。

以上が私たちの考える地域学なのですが、これは私たちの基本的なスタンスの表明というべきものです。地域学を創るという仕事はようやく一歩を踏み出したにすぎません。ですから、私たちはこれからさまざまな学問だとか学問分野、それから地域や生活の場で起こっている多くの動きから学んでいかなければなりません。この地域学研究大会も、そのための場の一つです。

取り組むべき課題

私たちがこれから取り組むべき課題というのは多々あると思います。例えば自然と人間の関係という大問題があります。自然は地域の土台というべきもので、私たちの生活はこの土台の上で営まれております。生活のあり方も人の考え方や感じ方も、要するに文化の総体がこの自然という土台によってある程度枠づけられていると考えています。そういう意味では、私たちは自然に働きかけ

られる存在です。その一方で、人は自然に働きかけて暮らしをつくってきました。地域は人間の活動が刻印され、蓄積された歴史的所産でもあります。地域性を尊重して、私たちの暮らしをつくっていかうとするときに、自然と人間の営みとの関係のありようから始めなければなりません。

この点について、里山里海再生という観点から先進的な取り組みをなさっているのが、これからお話をさせていただきます中村浩二先生です。中村先生は生態学が御専門だそうですが、専門の枠を超えた非常に大きな構想のもとに驚くべき活動を展開されております。また、私たち教員の多くは地域学の専門家というわけではありません。それぞれ別の学問分野でトレーニングを受けてきました。しかしながら、この学部で地域学に取り組むとなりますと、専門の枠を超えて構想し実践することが求められています。中村先生の仕事は、こうした点に関しても、私たち教員にとってとても参考になるものであろうと考えています。

それから、次の栗原彬先生の場合は、政治社会学が御専門で、日本ボランティア学会の代表をされております。先生の御著書、それからボランティア学会のホームページ、学会誌を読ませていただきましたが、知の実践という意味で、地域学がこれから検討すべきことにもうずいぶん前から取り組んでおられるという印象を強く持ちました。人を支配するのでも、人から支配されるのでもない、そういう個人が市民としてみずからの意思を持って、ネットワークをつくりながら粘り強く生活を変えていく、社会を変えていく、そして親密圏から新たな公共性を立ち上げていく、こういうことがボランティア学会や先生のお仕事の非常に重要なエッセンスではないかと考えました。

中村先生と栗原先生は、ともに私たちのはるか先を行くお仕事をされていますので、これから基調講演とその後の意見交換を通して、私たちの地域学に新たな豊かさと深さを加えることになるのではないかと大変期待しております。簡単ですが、これで私の趣旨説明を終わらせていただきます。(拍手)

■福田(司会) それでは、第1部の基調講演に参ります。まず、お二人の講師の先生を御紹介申し上げます。

講師紹介

最初に御講演を賜りますのは中村浩二先生です。中村先生は金沢大学の教授でいらっしゃいますとともに、地域貢献担当の学長補佐をされておられます。また、環日本海域環境研究センター長も務めていらっしゃいます。御専門は、先ほども御紹介にありましたが、生態学ということでございますが、能登半島の過疎問題にも向き合って、金沢大学能登学舎における「能登里山マイスター」養成プログラムのプロジェクト代表もなさっておられます。本日は、中村先生御自身の専門領域からの地域課題への向き合い方や展開のあり方、そして金沢大学の能登プロジェクトの御経験を踏まえて、地域学への問題を提起していただきます。

続きまして、栗原彬先生を御紹介申し上げます。栗原先生は立教大学の名誉教授でいらっしゃいますとともに、日本ボランティア学会の代表を務めていらっしゃいます。熊本県の水俣や山形県の高島の現場への長年のかかわりから、人間のボランティアな生き方について考えてこられました。また、若者の生き方や地域社会における弱者の視点から、社会的排除や差別に関する御研究も続けていらっしゃいます。本日は、栗原先生のボランティア学会での多くの蓄積や御研究、御活躍の視点から、地域学研究に御提案をいただきたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、最初に中村浩二先生より御講演を賜ります。題目は、「地域の課題に向き合う研究と人材養成—〈能登里山マイスター〉養成プログラムから」です。中村先生、よろしくお願ひいたしま

す。(拍手)

基調講演 1 「地域の課題に向き合う研究と人材養成—<能登里山マイスター>養成プログラムから」

■中村 皆さん、こんにちは。今、御紹介いただきました金沢大学の中村と申します。

今日、地域学部のある鳥取大学に参りまして大変うれしく思っております。といいますのは、私は、今御紹介いただきましたように、もともと昆虫の生態学の専門家として、地域学ということをちゃんと考えたことがありません。これは家中先生から大分前にいただいた、先ほど御紹介のあった『地域学入門』という本ですが、なかなか読む時間がなくてチョット読んだだけで、サボっていたのですが、今日飛行機の中で大急ぎでざっと全部見ました。そうしますと、もう8年間もいろいろなことをされておまして、先ほど柳原先生のレビューがありました、本当にたくさんのことがよくまとまって書いてありまして、私たちがこれからいろいろなことを進める上で大変勉強になると思いました。今日、私がお話しするのは、いわば我流で、あまり難しいことを考えずに、とにかく能登半島とか金沢のキャンパスの中でいろんなことをしてきた話です。まとまっていませんし、繰り返しが多いかもしれませんが、どうぞ御了承ください。

会場に私のパワーポイントのプリントと、私たちのプロジェクトのパンフレットを置いてもらっています。今日は「能登里山マイスター」養成プログラムという人材養成プログラムを中心にお話ししたいと思っていますが、そのほかにも、いろんなことをやっています、このパンフにそれがまとめてあります。

もう一つは『能登2011』という冊子です。前から出かけている方もいたのですが、最近、金沢大学の中でいろいろな分野の方が能登半島へ出かけています。私たちグループだけではなく、医学部のお医者さんとか経済学部の先生とか、ようやく、流れとつながりができつつあります。それから地元には、里山駐村研究員（金沢大学が委嘱）という方々もいらっしやいます。能登に関係されている、そういう方々に集まってもらい、この冊子をつくりました。

自己紹介—昆虫生態学研究

自己紹介しますと、私は、さっき言いましたように昆虫の研究者です。昆虫生態学といっても、イメージがわからないと思いますので、ここに写真を示します。難しいことは何もありません。水田へ出かけていって網を振りますと、中にたくさんの虫やクモが入ります。それを全部種類ごとに数えます。これはなかなか大変な作業です。

これは10年ほど前から復元中の棚田で、大学のキャンパスの中にあります。初めこの棚田は荒れ放題でしたが、だんだん人手をかけて棚田らしくなってきました。人手が入り、もう一度もとの水田に戻ると、生物多様性が高まるとよく言われていますが、それが本当かどうか、あまり研究がないので、確かめられていません。それからこれは地面にポリ瓶を埋めまして、地面を歩いている虫を落として採集しているところです。いろんな林や田んぼでとれる虫の種類が、どう違うかを調べます。これは飛んでいる虫をとる提灯型のトラップです。

この写真には、私のインドネシアからの留学生が写っています。今は中国からの留学生がこの調査をやっています。たくさんの留学生や日本人の大学院生がここで調査して博士論文を書いています。大学のキャンパス内だけでなく、能登半島でも、いろいろな調査をやっています。こんな泥臭い、大変労力のかかることが私の研究です。もう30年ぐらいインドネシアへ行ったり来たりして

います。熱帯でもこういうふういろいろな虫をとり、全部数えて同定して、1年間のうち、どの季節に数が増えたり、減ったりしているかを調べています。

今日は、ここにプリントがありますから、細かいことはやめて、できるだけ大まかな話をさせていただきます。

里山里海とは

まず、里山里海という言葉をよく聞かれているかもしれませんが、里山里海とは何か、なぜ里山里海が大事なのか、説明します。里山里海には、いろいろな問題が起こっています。おそらく鳥取とか島根もそうだと思うのですが、過疎化、高齢化が深刻です。それで、農業ができなくなりつつあります。その話をして、それから私たちが我流でやっている、金沢大学の角間キャンパスという金沢市郊外にあるキャンパスでの活動と、能登半島で進めていることを紹介します。

里山というのはもちろん日本の言葉ですが、もう大分前から英語で「SATOYAMA」と言われていますし、「SATOUMI」も最近、英語になりつつあります。「TSUNAMI」も英語になっています。英語になるほど、日本の里山は、世界的に見ても重要なアイデアを含んでいるということです。私は日本の里山の現状評価を国連大学と一緒にやってみて、もう5-6年間その作業に組んでおり、現在、里山がどんな状態か、昔からどういうふうに変わってきたか、歴史と現状、これまでにとられた対策を調べています。里山問題の対策として、地域振興政策がとられたり、補助金が配られたりしています。その効果や問題点なども調べています。このプロジェクトを「日本の里山里海の評価」と呼んでいます。「SATOYAMAイニシアティブ」という生物多様性を重視した里山に関する国際プロジェクトもあります。

実は来週、金沢で「国際生物多様性の10年キックオフシンポ」という国連の行事が来週あります。去年COP10という生物多様性の国際会議が名古屋であったのを覚えておられる方もいると思います。平成24年6月に「能登の里山・里海」が世界農業遺産(Globally Important Agricultural Heritage Systems, GIAHS、ジアスと発音)に認定されまして、一時、新聞に出ました。世界自然遺産ですと、日本には屋久島とか知床がありますが、世界農業遺産は、あまり知られていません。GIAHSは、国連の食糧機関(FAO)が認定しています。私は、これらの国際的活動にもすこし、関係しています。能登半島は過疎、高齢化が大変激しいのですが、私たちの目標は、こういう国際的な流れも活用して、人材を養成して能登半島を元気にすること、里山里海の集落や町を活性化していくこと、できれば人口をもう一度取り戻すこと(なかなかそんなことは大学でできません)です。その中で、私たち自身も勉強し、学生たちもいろいろなことを学んで活性化されていくことを目指しています。

まず、里山とは何かといいますが、これは英語の本ですが、ここに日本のごく普通の農村が出ています。田んぼがあつて、林があつて、水路があり、家があります。里山というのは、別に棚田でなくても構いません。普通、日本では鎮守の森がありますが、その必要はなくて、農業、林業などをしながら人間が生産のために使っている景観のことを里山と、ごく簡単に定義するのが便利です。

今、世界的に里山を議論しようとする、鎮守の森とか、日本的なものにこだわると国際的な議論や比較ができませんから、なるべく一般的ということで、ここに書いてありますように、農林業等の人手によって形成されてきた農村の生態系であると定義しています。里海とは、これは能登の岩礁地帯の風景です(砂浜でもいいのですが)。こういう人が魚をとったり海藻を拾ったりしている沿岸地帯のことをいいます。

なぜ里山が重要か

なぜ大事かという、まずここで農業などがされています。林業もされています、ここでは水産業がされています。生産がされていることが一番大事なことです。農業、林業、水産業などの重要性が忘れられがちですが、日本の国土の4割は里山なのです。石川県では6割から7割が里山です。里山は、いま生物多様性のホットスポットになっています。メダカ、ゲンゴロウ、トノサマガエルなども今、どんどん絶滅しかけています。それから、里山は、日本の風土であり、伝統文化が残り、石川ですと「あえのこと」という神事が、ちょうど今ごろ行われています。

里山は、生態学的にいいですよ、持続可能な循環システムです。これは私たちの「日本の里山・里海評価」の本に出ているイメージ図ですが、実際には、今こんなに人がいません。ここに子供がいっぱい描かれていますが、おじいさん、おばあさんしかいませんし、こういうところが休耕地になっています。

里海もにぎやかそうに描かれていますが、実はそうではありません。農業をされている方々の日本全体の平均年齢は67歳くらい、漁業もほぼ同年齢です。10年後の予想は、それプラス10歳です。10年前はマイナス10歳でした。

里山と里海はつながっており、里山からの栄養分が海に流れ込み、海藻(草)や魚が育ちます。里山里海は切り離せない、両方とも非常に大事なものです。気仙沼の畠山重篤さんが、「森は海の恋人」という運動をもう20何年されています。3月11日の東北大地震で畠山さん御自身も大被害を受けられました。

生態系サービス

最近、「生態系サービス」という言葉がよく使われています。「自然の恵み」の新しい表現です。里山からコメや木材などの生産物が得られ(供給サービス)、農村や森林がちゃんと管理されますと、水や空気がきれいになります(調節サービス)。都市に住んでいる人たちも、農村がちゃんと活動し、里山が管理されることによって大きな利益を得ています。しかし今、里山里海がさびれており、いろいろな災害も起こりやすくなったといわれています。里山は、文化にとっても非常に重要です(文化サービス)。

昔はこういうふうにも木を伐ったら、切り株から萌芽(ぼうが)が出てきて、10年とか、20〜30年サイクルで伐採していました。いまは石油、ガス、化学肥料もありますから、里山林は放置されています。詳細は、皆さんのプリントにありますので簡単にしゃべります。里山里海について、一番大事なことは、農林業者、それから漁業者が、生産のために自然に働きかけることにより、作りあげられ、維持されている身近な自然ということです。しかし、今、里山里海は使われず、放置されている上に、TPPとかいろいろな議論が起こっています。

もう一つ困ったことは、里山ノスタルジーとか里山ユートピアといったように里山を極端に美化する人たちもいます。とくに大都会の人に多いようです。里山は生産と生業の場なのです。

能登の現状—過疎高齢化と里山の荒廃

では里山問題について、石川県を例にとりお話しします。石川県はこんなふうにも細長く、鳥取県と同じ日本海側にあります。今日、飛行機が空港へおるときに、海岸を見ていると、本当によく似ているなと思いました。能登半島の陸地は全部里山、沿岸は全部里海であり、たくさんの漁港があります。

一番の重要問題は、東京と能登は同じ面積なのですが、東京には1, 200万人いますが、能登には23万人ぐらいいきません。あと20年ほどして2030年には、10万人になってしまいます。現在の人口と年齢構成から、残念ながらそう予測されています。これから限界集落がふえ、さらに集落がなくなってゆくのではないのでしょうか。

能登には今も様々な文化があります。輪島塗、日本酒はじめ、いろいろな伝統産業がありますが、これから能登がどうなっていくのか、というのが私たちの出発点です。なくなってもいいという議論も、当然あると思います。いろいろな議論を科学的に正々堂々とやればいいと思います。そのために、この地域学部とか、金沢大学では地域創造学類があります。どんな議論ができるか、期待しています。

これは奥能登と言われている、私たちが活動している地域です。輪島市、珠洲市、能登町、穴水町という4自治体があり、石川県、金沢大学と一緒に「地域づくり連携協定」を結んでいます。これは奥能登の人口の年齢構成です。どの町も全く同じパターンでして、20歳代の人がいません。特に若い女性はほとんどいません。

これは金沢と東京の人口・年齢構成です。東京の人口サイズ（縦軸）が、ずっと大きいことに注意して下さい。金沢には若い人が結構います。奥能登では、若者がよそへ出ていかざるを得ないという現実があります。能登では、いろいろな補助金をもらって、イベントをしたりして頑張っています。しかし、いくらイベントをしても、人口の過疎高齢化、特に、若い人が住めないことを何とかできなかつたら、能登の活性化はうまくゆきません。これまで50年以上、能登半島を元気にするために、いろいろな振興策が打たれてきました。それにもかかわらず一貫して人口が減り、高齢化しているのです。

里山の根本問題は、過疎高齢化によって管理ができなくなっていることです。金沢大学の角間キャンパスは、金沢の市街地のすぐ近くにあり、昔こも農村（里山）でした。ここでもモウソウウチクがどんどん広がっており、竹林内は、こんなに荒れています。ボランティアの方々も本当によくやっていますが、焼け石に水です。金沢市の外側を走る山側環状線というのがあります。そこを走りますと、至るところが同じ状況になっています。

鳥取でもツキノワグマが近郊に出没しているのでしょうか。金沢は自然に恵まれていて、町のすぐ近くまで山が迫っていますから、クマがたくさん人里に出てくるようになりました（今年はあまり出て来ませんでした）。京都、福井の方面からはイノシシとシカがどんどん北上しています。これまで石川県にはほとんどシカ、イノシシはいなかったのですが、すでに加賀地域、金沢周辺まで広がり、いまでは、能登へも入ろうとしています。クマも能登に入ろうとしています。ニホンザルは白山山ろくにたくさんおりまして、おじいさん、おばあさんしかいない農村へ入り込んで、悪さをしています。里の人の力がなくなってくると、だんだん動物の力が強くなり、制御できなくなりつつあります。里山の手入れができていないから、動物たちは安心してよく茂った里山に出てくるのです。

これは金沢大学のキャンパスです（200ha）。このなかにはクマが何頭かすみついています。これは杉林です、大部分は放置されて、このように荒れています。石川県では、森林環境税を使って、強間伐という方法でたくさん伐採していますが、林内に間伐材が放置されています。山奥で伐採しているので運び出せないのです。全体の仕組みにもっと工夫が必要です。今の日本には、いろんな問題がありますが、ボディーブローのように慢性的に、徐々に日本を落ち込ませているのは、過疎高齢化により、里山里海を管理できなくなっていることではないかと思います。

金沢大学の里山里海活動—角間キャンパスと能登学舎

金沢大学の活動をお話しします。二つありまして、一つはキャンパス内でやっていること、もう一つは能登半島での活動です。キャンパス内では1999年頃から地域のボランティアの方たちと一緒に環境教育や保全活動をしています。能登では、過疎高齢化が激しいので、地域に定住する若手人材を養成して地域再生につなげようとしています。

これは金沢大学です。このあたりに角間（かくま）キャンパスがあり、校舎はこんな様子です。ここは兼六園とか金沢市の中心街があるところです。角間キャンパスには、元は里山林だった森が74ヘクタールほど残ってしまっていて、そこを使って「角間の里山自然学校」というのを10年あまり前からやっております。これは大学自体が運営しているのではなくて、私もボランティアとしてこれをずっと今まで運営してきました。始めてから10年以上かかって、2010年8月ようやく「角間の里山本部」ができました。これは大学の組織であり、私が幹事長をやっています。大学から経常経費は少し出ますが、人件費はでません。

能登では、能登半島の先端にある珠洲市の廃校になった小学校（金沢大学「能登学舎」と呼んでいます）を借りまして、2006年から、ここでいくつかのプロジェクトをやっています。そのなかでは「能登里山マイスター」養成プログラムが一番大きなものです。2010年11月に能登の方にもやっと、「能登オペレーティングユニット」という学内組織ができました。これは能登本部といってもいいのですが、同じような名前にしますと、「両方を一緒にして里山本部にしろ」と言われかねないので、違った名前にしました。

角間ではキャンパス内の里山ゾーンを使って、いろいろな活動をしています。大きな問題が二つあります。一つは、ボランティアさんに新しい人がなかなか入ってこず、だんだん高齢化していることと、もう一つは、こっちの方が深刻な問題ですが、角間キャンパスには、学生が8000人ぐらいいるのですが、あまり入ってこないのです。それにはいろいろな原因があると思いますが、今のところ学生がほとんど里山活動に参加していません。ようやく学生たちへの呼びかけを、本格的に始めようとしているのが現状です。

つぎに能登の話をしたと思います。先ほどの能登学舎では、文科省科学技術振興調整費による「能登里山マイスター」養成プログラム（2007～、5年間）、三井物産環境基金による「能登半島里山里海アクティビティ」（2009～、3年間）、同じ三井の支援では「能登半島里山里海自然学校」は、三井物産の支援（2006～2008）で立ち上げ、今も続いています。そのほか、日本財団による「能登いきものマイスター養成講座」とか、人材養成を中心にいろいろとやっています。大気環境の研究グループ（能登スーパーサイト）もあるし、いろんな人がようやく集まってきて、これからさらに活発化しそうです。これからの能登での活動には、サイエンティフィックなバックグラウンドがもっと要と思っています。

どうして、角間キャンパスと能登で同時に活動しているかを説明します。角間では活動がそれなりに継続しています。しかし、里山問題といったときに、角間キャンパスのような市街地にある「放棄された里山」で、ボランティアさんが汗を流していても、その活動自体には意味がありますが、それで本質的なことが片づくわけではありません。過疎高齢化が本当に起こって、里山の一番大事なところが徐々に壊れつつある能登半島での活動が大事です（それからこっちにある加賀地域の山間部でも過疎高齢化は深刻です）。能登での人材養成やそれに関連した生態環境、集落、世帯調査等が重要です。

「能登里山マイスター」養成プログラムとは

この辺に金沢市（金沢大学）がありまして、能登半島の一番先端に旧・小泊小学校があります。珠洲市が、この学校を私たちのために改装してくれました。まず、2006年に「里山里海自然学校」を開始しました。能登には里山だけでなく、里海もありますから、やや長いのですが、里山里海自然学校という名前にしました。ここに私の教え子のポストドクをひとり派遣し、常駐させました。ここは人口が少ないのですが、地域の方々には、金沢よりずっと切迫感があります。ですから、いろんな方が集まってきて、地域の人口を考えますと、高い比率で集まり、2年ぐらいの間にNPOがつくられ活動を始めました。NPOは今も続いています。私たちは、ここを金沢大学「能登学舎」と呼んでいます、地元の方は「里山里海」というニックネームで呼んでいます。

「能登里山マイスター」養成プログラムを翌年から始めました。どうしてこれを始めたかといいますと、自然学校というのは、親しみやすく、いくらでもいろいろなことができます。しかし、それだけにとどまらず、大学の幅広い研究教育分野を使って、即効性はなくても、地域に拡がり長期的な効果をもたらす、人材養成が重要ではあると判断して、「里山マイスター養成プログラム」を始めました。

どんな仕組みかという、文科省の科学技術振興調整費に「地域再生人材創出拠点の形成」という物々しい名前の助成金がありまして、それに「能登里山マイスター」養成プログラムという提案で応募しました。この地域再生のための人材創出プログラムは、2006年から全国の大学・高専から、年に10課題ほどずつ採択されており、現在、全部で40ぐらいあり、様々な内容で活動しています。私たちの里山マイスター養成事業は、5年間の計画です。今年度が最終年ですので、春になるとこのプロジェクトは終わります。そのあと、より発展した形で後継版を立ち上げるために、いま一生懸命、準備をしているところです。

金沢大学には農学部がありません。里山里海の重要性を考えたら、環境に配慮した里山の活用、環境配慮型の農林漁業を中心にして、それに取り組む若者を能登に呼び込み、農林水産業の産品に付加価値をつける人材、エコツーリズムを目指す人材、地域のリーダー人材の養成を目指すべきだと考えました。

多彩な講義・実習と卒業課題研究

人材養成というと、大学院の社会人コースの設置や、研究施設での研修などがよくある形です。私たちはそのような通常のやり方をとらず、直接現地でやることにしました。この校舎を能登学舎とし、現地に5人の若手特任助教、教務補佐員（ポストドク）に常駐してもらいました。5人は生態学や経済学の専門家であり、家族持ちの人もいますが、ここに定住しました。金沢大学には農学部がありませんから、珠洲の農業法人の代表（非常に有力な方です）に参加してもらっています。また、能登の農業法人や農業者の方々に「里山マイスター支援ネットワーク」というのをつくってもらいました。今、30個人・団体ぐらいに入っています。シニアスタッフには、石川県庁OBの農業専門家、金沢の民間テレビ局長をしていたお二人に特任教授になってもらい、地元の3人の農業、林業、水産業の専門家に実技指導をもらっています。それを教員組織として里山マイスター養成プログラムをスタートさせました。

里山マイスターは2年間のコースで、受講生は学生ではなく、社会人なので金曜夜（一般公開）と土曜午前中に授業・ゼミ、午後は実習をやります。受講生は何か職を持った社会人、例えば市役所職員とか、農協職員、自営業を営んでいます。東京等の大都会から来た若者は、自分で何か職を

探して食べていかなければなりませんから、金曜夜と土曜だけ授業を開いています。

受講生はみんな自分で研究課題をさがし、卒業論文を書き、卒業発表のプレゼンをやり、審査を受けるというやり方です。単なる連続講演会や研修会ではありません。

これは4期生（最終グループ）の入講式の写真です。2年制ですので5年間に4回しか入学生を受入れられません。今、2年目で卒論を書いているところですが、全部で28人が入講しました。もう最後のチャンスだということで、地元の人々を中心に、いい人がいっぱい入ってきました。

若手人材の養成ということで、年齢を45歳に制限してしまして、46歳以上の方は特別聴講生として受け入れています。今、全部で40人ぐらいの人が卒論に取り組んでいます。マイスター事業では、環境配慮の農業などを中心にしていますが、受講生は非常に広い興味を持っており、農業以外にもいろんなことをしたい人がいっぱいいます。それで5人の若手スタッフによる担任制をとり、マン・ツー・マンで、試行錯誤しながら教えるシステムをとっています。

篤農人材の養成については、農学部がないのにこんなことを言っていますが、農業法人などに実地指導をしてもらっていますから、何とかなっています。同時にビジネス人材とか、リーダーになる人材の養成も目指しています。

環境に優しい農林業を目指すことが、大きな方向性です。これは支援ネットに入っている農家の方のご支援を受け、相談しながらやっています。現実には農業で生活して行くことは大変です。簡単に無農薬にしたりはできないのです。環境配慮の農業には、いろんなやり方があり、生物多様性についてちゃんと調べて科学的なデータを出していく必要があります。環境に優しい農業をすれば当然、食の安全性も保証されるでしょうから、少しでも高い米が売れることを目指しています。エコツーリズム、グリーンツーリズムをめざしている受講生も多く、自分で民宿を開こうとしている人もいます、なかなか簡単にはいきませんが、いずれにしても、能登をイメージアップして、そこに若者が集まってくるようにする、それが目標です。

里山マイスターのスタートの時点で、奥能登4自治体、石川県と地域づくり連携協定を結んでいます。

受講生・修了生の活動とネットワーク形成

これは受講生の構成です。私たちは初め、大都会からできるだけ多くの若者に来てもらって、働く場を与え、定住してもらうことをプログラムの中心にしようとしたのですが、簡単にはいきませんでした。今のところ13人が14人、大都会から来て現地に住み込んでいろいろやっています。しかし、それで収入を得ていくというのはなかなか難しいです。それでも、脱落せずに頑張っている受講生がたくさんいます。

市役所の若手職員が受講生になり、ここで勉強して市役所へ帰って、市役所の環境部門、企画部門の窓口になって活躍しています。たとえば、奥能登には、たくさんある空き家の登録、活用システムをつくるとか、市役所にいるマイスターOBが活躍しています。農協の職員も活躍の場を与えられています。OB達があちこちでぼちぼちですが動いています。これまでに38人、卒業生がおりまして、OBのネットワークもすでにできています。

時間がありませんから簡単にしか言えませんが、常駐の若手スタッフが一生懸命やってくれて、カリキュラムを年ごとに改定しています。この里山マイスタープログラムは、金沢大学学長を代表者として（私が研究代表者）で文科省からお金を取って運営しています。しかし、これは外部資金により、大学から「飛び出して」やっているのです。金沢大学全体として、会議を重ねて申請し、

採択されたというようなことではなくて、(すこし乱暴ないい方をすれば) 私たちの里山里海プロジェクトが、学長や役員会のご理解を得て申請し、外部資金をとってくる。それを大学がかなり好きなようにやらせてくれています。しかし、外へ出て、外部資金を取って雇用した特任スタッフを中心としてやっていますので、学内基盤がそう強くないのが現状です。これから学内基盤をもっと広げて、いろんな分野の教員に入ってもらうことが課題です(学内主流化というらしいのですが)。

学内に成果を還流していくということが重要です。学生教育にもこういうプログラムを使って、例えば地域創造学類というのがありますので、その教育とジョイントして、能登にあるいろんなリソースを使っていくということも、今、一生懸命準備しているところです。

今やっている実習はこんな感じで、いろいろとやっています。卒論も実に内容が多彩です。私のところのスタッフはもう本当にマン・ツー・マンでやっていますから、ものすごく苦勞してくれていると思います。審査会では、例えば農協職員が受講生の場合は、農協の理事長に審査員の一人に入ってもらい、市役所の職員ですと市長さん、助役さんに審査員に入ってもらっています。

これは修了生の一覧表で、何とか目標の60人を達成したいと思っています。

修了生はいろんなところで活躍してしまっていて、例えばこれは地元の若者ですが、半導体メーカーで働いていたんですが、どうしても農業をやりたいということで、そこをやめて、里山マイスターへ入ってきて、今、環境配慮の農業を一生懸命勉強しながら、がんばっています。

カニかまぼこで有名な会社が能登にあります。その若手社員が1期生で来てくれました。会社が製品の材料にする野菜の無農薬の栽培をはじめました。地域の休耕田を使って大きな成果を上げています。個人的にもNPOを立ち上げたり、活動の範囲を広げています。

この若者は、金沢から毎週通いまして、神棚に供えるサカキという灌木の枝先の葉を製品化しました。大分軌道に乗ってきており、地域のお年寄りがお金を稼げるようになってきました。

これは東京から来た若夫婦なのですが、2人で空き家を活用した移住交流活動の立ち上げを目指しています。資本金もありませんし、何とか使える空き家はみつかりましたが、苦戦しています。それでも地元のNPOの職員として何とか生活をつないでいるところです。

里山マイスターを始めた頃、受講生のなかでは地元の若者たちは、非常に控え目に見えたのですが、年年、生き活きてきて、徐々に地力を発揮しつつあります。地元の若者は、家を持ち、田畑、林も持っていて生活基盤があります。地元の若者同士が、地域や集落を越えて、大都会からやってきた若者と連携して、3カ所の棚田をネットワーク化しました。そこでとれた棚田米を金沢や大都会で販売し始めています。私たちの別のプロジェクト(里山里海アクティビティ)のスタッフと里山マイスター受講生が一緒になって、補助金とりに成功しました。おもしろいことが始まりつつあります

修了生がもうすぐ60人になりそうです。修了生がネットワークをつくり、それに大学や行政が、いろいろな形で応援しながら、動いているところです。受講生、修了生に聞いたら、里山マイスターを受講して、何が一番よかったかというところ、いろんな授業を開けたこともよかったのですが、それ以上に受講生のネットワークができたことを評価しています。自分と同じような若者が集まって、地域を越えて、異業種間で仲間になれたことが非常によかったと言っています。

環境配慮型農業のための教育研究

私自身が生態学の研究者ですし、常駐スタッフにも生態学の専門家が3名もいます。農業が専門ではなく、経験ありませんが、水田の生物多様性をどうしたらふやせるか、それには水管理の仕

方を変えると、イネのモミを直まきにするとか、地元の農家と一緒に、マイスターの実習、レクチャーの一環として研究に取り組んでいます。常駐スタッフは、マイスター事業の運営や受講生のマン・ツー・マン指導に非常に忙しいので、研究に専念できるわけではありませんが、頑張っており研究成果が出てきつつあります。実習用に畑や田んぼを貸してもらっている支援農家に集まっていただいて、成果の発表会を時々開催しています。農家の方々はものすごく熱心で、もっと自分の田んぼを使えとか、農法を調査にあわせて調整するとか、いろいろと協力してもらっています。

今年6月に能登の里山里海は、世界農業遺産（GIAHS）に認定されました。それにそって、里山里海の農林水産業を環境配慮型に変えてゆくことが求められています。石川県では、生物多様性のデータや、農法のガイドラインなどが整備されておらず、農家も何をしたいのか分からず、やや戸惑っています。実習の一環として、実施している水田の生物多様性調査や、農家への発表会は重要です。

この写真のように、水田にいる虫を全部とって、すべて標本にし、同定します。そうしないと、ちゃんとしたことがわかりません。あちこちの支援ネット農家の田んぼを借りています。農家は、生産のために農作業をしているので、大学があればこれお願いしても、栽培法を急に変えることはできませんが、すこしずつ、協力、連携が進んでいます。水田の生物がだんだんとふえていくような、実績づくりを農家と一緒に進めています。

地域に定住する人材育成はとくに大事です。里山マイスターはその中心的プロジェクトです。必要な研究は、生態学だけではなく、個人や集落の聞き取り調査等様々な分野があります。地域と大学と一緒に進める環境配慮がやっと動き出したという感じです。

里山里海の国際化-SATOYAMAイニシアティブ

里山里海の国際化について大急ぎで説明します。去年の名古屋の国連のCOP10（第10回生物多様性条約締約国会議）のときに、環境省、国連大学等が中心となり、「SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ、IPSI」が始まりました。私たちもこの創立メンバーになり、世界各地のグループとつながりができています。国際ネットワークづくりは、大学ではやりやすいことですが、石川県庁や県内の市町は、なかなか入っていきませんから、石川県では、大学が中心になってやっています。

皆さんの資料の中に、里山・里海評価の項目だけをあげておきました。「日本の里山・里海評価、JSSA」（以前は、里山里海サブグローバル評価、SGAと呼んでいました）が実施され、「SATOYAMAイニシアティブ」が始まり、能登と佐渡が「世界農業遺産」に認定されたりして、里山里海の国際化がだんだん進みつつあります。「里山・里海評価」では、全国を5クラスター（地区）に分け、クラスターごとに里山里海の現状を調べました。北海道と九州の里山では、全然違うので、クラスターに分けました。北海道では、大規模な農業、牧畜が行われており、里山といういい方がピンとこないところもありますが、里山を農林業が行われているところと広く定義し直すことで、地域間の比較をしやすくしました。新たに調査するのではなく、すでに蓄積されている資料を集め、比較検討する作業を中心にしました。また、日本人だけでなく、国外の研究者も参加して、国際的な評価作業を行い、報告書は英語と日本語で出版します。内容は、里山が歴史的にどう変遷してきたか（主に最近50年を扱う）、現状、変化の傾向とその原因、（過疎高齢化のような）里山問題に、これまでどんな対応策がとられてきたのか、これからの里山はどうあるべきか（シナリオ）を含みます。クラスターごとの報告書は、同じ章立てをとり、フォーマットをそろえて出版されました（2

011年)。クラスター報告書の情報も取り入れた、国レポート(約300ページ)が、日本語版は朝倉書店から、英語版は国連大学から出版されます。

世界農業遺産

世界農業遺産(GIAHS)について少しだけ説明します。先進国で初めて、日本の佐渡と能登が農業遺産に認定されました(国内初、2011年6月)。能登は「能登の里山・里海」、佐渡は「朱鷺と暮らす郷づくり」で認定されました。日本には能登、佐渡以外にもいい場所がいくらでもありますから、どうして能登、佐渡だけが認定されたのかとよく聞かれます。両地が認定されるように、GIAHSを運営している国連食糧機関(FAO)に一生懸命働きかけたということに尽きると思います。

これは農業の遺産といっても、今の農業をストップして保存するのではなくて、農業をやりながら、集落を守り、文化と生物多様性を守り、持続的な発展をしていくということであり、UNESCOの世界自然遺産や文化遺産とは違うものです。

これまで世界で14-15カ所が認定されていますが、全部、発展途上国です。今度の佐渡と能登は、初めての先進国での認定です。能登半島では、今も独特の文化が残り、素晴らしい景観があります。しかし、全体としては過疎高齢化によって、だんだん劣化しています。それを世界農業遺産に登録してもらって、知名度を上げて、世界といろいろ交流しながら、現在の能登の農業システムのいいところを守り、さらに発展させていくいいチャンスです。それには何をしたらいいのでしょうか。それぞれ地域学といいますが、総合的な形での支援が必要だと思っています。

GIAHSは、食糧と生計、それから生物多様性、伝統文化、すぐれた景観とか、現在ある能登半島の農業システムといいますが、農業のあり方を守りながら、さらに発展させていくという趣旨です。しかし、それは簡単ではありません。世界の発展途上国のあちこちに、こういうすごい農業システムがあります。今回、日本が初めて先進国から認定されました。これからどういうふうにGIAHSのなかで、貢献していくのか、が問われています。

里山マイスターは小さな活動ですが、能登の農林水産業が元気になり、農林水産業が何とか持続できるように、生物多様性を活用すること、文化、国際交流につなげていくこと。大きな流れのなかで、GIAHSというシステムを使えないかと思っています。

今も能登の人口はだんだん減っています。能登には里山里海という、人手によって作り上げられてきた自然があります。その魅力を使って、能登を元気にする。里山里海は、能登の大きな土台です。また、日本全体を考えても、ものすごく大きな土台です。能登の里山里海を使って、人、地域、国を超えたつながりをつくっていく。国内の大都市との交流、さらに海外と交流しながら、その中で大学が、どんな役割を果たせるのか。関与の仕方をもう一度整理したいと思います。先ほど御紹介した里山マイスターも、今年度で終わりますが、次のプロジェクトではさらに大きなつながりをつくれる、人材の養成へとステップアップしていきたいと思っています。

大学の役割

時間が残り少なくなって来ました。大学の役割ということ、まとめのかわりにお話しさせていただきます。

私が常々感じることは、里山や生物多様性が話題になるとときには、いつも東京などの大都会の人々の問題意識が中心になっており、本当に問題が起きている地域の声が聞こえないことです。いつでも大都会の人たちのイニシアティブといいますが、力によって動かされている気がするのです。日

本全体を見ると、大都会にたくさんの人がいて、地域に人は少なく、高齢化しています。どうしても地域が無視されてしまうのです。例えば私たちが属している生態学会という学会がありますが、そこでの生物多様性の話題は、生物多様性の重要性や生物多様性を守れという議論ばかりです。現実には、能登はじめ、生物多様性がある地域自体が今、消滅の危機に陥っているのです。そんなことは、話題になりません（私は、この学会でも機会あるごとに、そのことを指摘しています）。

ただ単に生物多様性の重要性や保全だけを言ってもだめなのです。生物多様性を話題にするときには、どのようにして地域の問題につなげていくかを考えずに、学会の中で専門的議論ばかりしていても（それはそれで意味はありますが）仕方がありません。生物多様性の消滅の議論と同時に、地域がどうなるかという問題をアクティブに議論せねばなりません。

それから、どこでもボトムアップが大事だと言っています。しかし、どれだけボトムアップの実績や取り組みが実際にあるのでしょうか。残念ながら、ほとんどないと思います。そうなら、どのようにすれば、地域でボトムアップの取り組みができるか。いま起こっている問題を直視し分析し、本当に真剣に考えるというところから、私たちは取り組む必要があります。

しかし、地域にとって深刻な問題は、地域にはいろいろなインフラがすごく欠けていることです。人材が足りない。若者がいないだけではなく、専門家が非常に少ない。生物多様性を調べようと思えば（大小優劣にかかわらず）博物館的施設がいります。情報ネットワーク、データベースが要ります。しかし、石川県には、そういうものがほとんど整備されていません（はっきりした計画を開きません）。ですから、どこに何が、どのぐらいいるか、という生物多様性のデータベースを、大学だけではできないので、行政に働きかけて一緒に作り上げていく。とくに人材がキーです。生物多様性を扱える人、役所にいるのでしょうか。生物多様性を配慮しながら農業をする人。大学の中で農業、地域のことを考えながら研究するような人とか、そういうインフラづくりがとくに大事だと思っています。

地域が主体的な力とイニシアティブを持って、問題を発信していくようなことができていません。どうしたら能登からの声が大きくなるか、ということをいつも考えています。

「里山マイスター」養成プログラムの意義

今、私たちのいろいろな事業が最終年を迎えています。実は昨夕、能登空港（奥能登4自治体のちょうど真ん中にある）にある講義室で、里山マイスターの地域づくり支援講座の最終回をやってきました。5年間を回顧して、私は最後のまとめにこんな話をしました。スタートのころ、文科省との打ち合わせがたくさんありました。担当者がなかなか認めてくれなかったことの一つは、どうして金沢大学内に拠点をおかず能登に拠点を置くのかでした。すでにお話ししたように、能登の先端に拠点を置いて事業を始めることは、里山マイスターの出発点です。最近はどうもそんなことを言われなくなりましたが。

それともう一つ、どうして多数の特任教員を雇うのかということ。マニュアルをつくって、それで講義をすれば、特任教員は1人か2人で十分ではないですかと言われました。そうではなしに、受講生にも地域にも、多様なニーズがあること。我々自身も地域のことがよくわからないではじめるので、できるだけたくさんの人を配置して、試行錯誤しながらやらざるを得ないと、強く反論しました。結局、2年目から5人雇うことができたのです。マニュアル化して授業をやればうまくいくといわれました。そのころもいまでも、簡単にマニュアル化できるほど、状況は単純ではないと私は思っていました（行き当たりばったりとは別の話ですし、マニュアル化自体を否定しているわけ

でもありません)。多様な地域のニーズと受講者の多様性に対応するために、できるだけ多くの若いスタッフを集めて、教育、人材養成をスタートさせる必要がある、と私は今でも思っています。

里山マイスターの予算が出ている文科省科学振興調整費というのは、旧科技厅系ですから、科学技術を使った地域振興、人材養成がモットーです。何度も里山マイスターのプログラムのどこに、科学や技術があるのですか言われました。農業、生態学は、立派なサイエンスなのですが、工学的な技術的側面が基準にされているためか、当方の意図がわかりにくかったようです。もっとも、当方の整理も完全ではなかったと思います。この辺のことは、これから学内外の理系、工学系、人社系の研究者との議論がさらに必要です。

里山マイスターでは、先ほども言いましたが、受講生が自分の課題を持ち、特任教員がマン・ツーマンで教えて、卒業論文を書いてゆきます。単なる連続講座、講習会とは、違うものです。

地域の自治体の方々としゃべっていると、大学とコンサル会社の区別をされていないように感じます。(私はコンサル会社については、よく知らないのですが) 大学は、できるだけ早く結論を出して何か役立つことをやってくれ、としきりに言われるのです。それはできたらいいと思うのですが、簡単に即効性の、しかも何か結果を出すということは、大学がやれることではないと思います。私は大学の大事な役割は、遅効性であっても人材養成だと思っています。このあたりをよく考えないと空回りするだけになります。また、「目に見える成果」とよく言われます。私は、目に見える成果とは具体的に何を期待されているのですかと、いつも聞き返したくなり、実際にそうしています。

ポストマイスター／さらなる人材養成に向けて

私たちは、来年度以降も里山マイスターを続けたいと思っています。それにはお金が要るわけで、今、一生懸命自治体とやりとりをしております。そのときに、現在の里山マイスターと同じことを繰り返す、つまり大学が大きな外部資金を取ってきて、それだけに依存した運営をすることはもうしません。こんどは、大学と地域が、それぞれお金を持ち寄ってやりましょうと提案しています。そのうえで役割分担、人材確保、経費の負担も含めて、各自治体は自己相応のものをやる覚悟を示してくれないと、継続というよりも、新しい出発はあり得ません。これまで、大学だけが働いて、自治体はサービスを受けていただけというのではなく、自治体の強い支援があったら、ここまで来られたことに間違いありません。しかし、次は一段上のステージに上がる必要があるのです。また、能登はいいところだ、と言っているだけではだめだから、外のことを考え、外に向かって発信してゆきましょう。すでに、国際化は別の世界の話ではなく、IPSIやGIAHSなどいろんなチャンスがあるわけですから、これを使って考えましょうと言っています。

里山マイスターだけではありませんが、人材養成が、私たちの一番大きな課題です。そのときに、受講生を育てること、これは当たり前なのですが、もう一つは若手スタッフを育てることが重要です。若手スタッフがこのプロジェクトですごく頑張ってくれていますが、それで摩耗してしまっただけではいけません。何とか若手スタッフ自身が研究者として、あるいは教育者、あるいは他の職業人として育っていくことが特に重要です。もう一つは、金沢大学の学内にどのように受け入れられ、あたらしい協力者を得られるかです。

私たちの里山マイスターを、一言でいうと、「学ぶ」ということではないでしょうか。毎週金曜夕方と土曜日だけという、限られた時間ですが、そのときにできるだけたくさんの方が集まって、受講生にとっては同じ年ごろの人たちが集まってきて、そこで学びと色々な交流がある。全国からすばらしい講師に来られる機会も多い。勉強することと友達を得るということです。教員も年長の

友達の一人です。だんだんネットワークができてゆくわけで、この学ぶことと友達を得るということがいちばん大事です。何かを変えていく、そして自分が変わっていくことが大事だと思います。

私たちは能登半島から始めて、外へどんどん発想を広げて、それでもう一度能登へ戻ってくる。そんな感じで、能登の国際化がすごく大事だと思います。

大学でないとできないことを大学らしくないやり方で

今日『地域学入門』を読んでいたら、一番大事な問いは、今なぜ地域かということだと書いてありました。いろいろなことが起きています。国際情勢の変化、東北では大災害が起きました。それに対して、残念ながらも今の日本は十分に対応ができておらず、停滞といいますか、劣化しているのではないかという気がするのです。

そのときに、私が言いたいのは、日本の面積に大きな割合を占めて、我々の生活、文化の基盤になっている里山里海の重要性と言うことです。そのことをできるだけ分析的にサイエンスとしていく（サイエンスというのは理工、医学だけでなく、文化、社会科学、人間科学も含めてですが）うえで、大学はどんな役割を果たせるのか。一方、いまの大学は、そんなことを一生懸命やろうとしているわけではないので、大学をどんどん変えていく必要があります。

昔は、「国破れて山河あり」だったのですが、今は「山河破れて国あり」のような感じです。東北のように激甚災害で里山里海の山河が一瞬のうちに破れました。能登では過疎高齢化で徐々に破れつつあります。山河が破れつつあるのに、「国」は、硬直化していて対応できていない。どうしていいかわからないといいますか、ちゃんとした手が打てていない状況ではないでしょうか。そのときに山河（里山里海）の重要性を再認識して、国に頼らず、地域自ら取り組んでいくことが大事だと思います。

私たちは、非常に拙いものですが、『里山復権』という本を出しました。なぜ「復権」という言葉を使ったかといいますと、能登半島では、地域の自信が失われているように感じます。地域の力を取り戻せないだろうか。県庁任せ、国任せではなくて、自分たちが管理し、自前の力を持つ、ガバナンスというのかもしれませんが、ボトムアップで自分たちが考え、実現していく心構えが必要です。

教育、研究、地域連携の3本柱が大学の使命とよく言われています。これは公式見解にすぎません。地域連携は、3本柱の割にはどうも細い柱になっている気がします。能登半島の里山里海の再生を目指した活動の一つのきっかけにして、バリッとした変化を構想できないかと思っています。いま、能登で起こっている現実をよく見て、何が問題か、解決に何が足りないのか、何ができそうかという、具体的な見きわめがあります。それにむけて、いろいろな分野の研究者が集まって議論できる仕組みを、学内外、国際的にもつくってゆきたいと思っています。

大学にも地域にもいろんなリソースがあって、地域の活性化のためにいろいろ試行しています。いろいろな活動が必要ですが、大事なことは、大学でないとできないことは何か。それをはっきり意識することだと思います。法律は遵守しなければいけません、大学らしくないやり方でやることも大事です。あっちでもこっちでも、よく似たことを役所、民間、大学などがやっています。大学でないとできないことをやるのが、キーだと思います。

どうも長い時間ありがとうございました。（拍手）

■福田（司会） 中村先生、ありがとうございました。先生への御質問があらうかと存じますが、第2部の方で承りますので、今はしばらく心の方にとどめ置きください。

続きまして、栗原彬先生によります「地域におけるボランタリーな生き方—地域学への期待」と題しまして御講演を賜ります。栗原先生、どうぞよろしく願いいたします。

基調講演2「地域におけるボランタリーな生き方—地域学への期待」

■栗原 皆さん、こんにちは。栗原彬と申します。

ボランティア学会とは

私はボランティア学会とそれから水俣フォーラムと、ずいぶん長い間、それぞれ代表を務めてまいりました。それで、その経験を踏まえてお話をしていこうと思っています。差し当たり、お手元に私のレジュメがあります、「地域におけるボランタリーな生き方」、サブタイトルが「地域学への期待」。A4で3枚、これをもとにお話をしていきます。それから、折り畳んだ日本ボランティア学会のパンフがあります。それから、「御来場いただいた皆さまへ」という水俣フォーラムへの勧誘のチラシがあります。

ボランティア学会というのは、何をするとところかといいますと、もう10年以上にわたってこの会をやっているわけですが、これを聞いていただくと、三つのキーワードというのが出ています。それは、経験知の科学と市民主体の研究と、それから知と実践の関係づくり、こういう三つのものが上がっているわけです。

これは実際にどんなことをやってきたのかということが、主な取り組みという年表がありますので、これを見ていただきますと、どんなところにその焦点を置いて、ボランティア学会が研究をしてきたかということがわかると思います。とりわけ今の三つのキーワードの中で、市民主体の研究という、ここが中心と言ったらいいと思います。ですから、これは学会ではありますけれども、この学会の中に大学の関係者ではない方がたくさん入ってらっしゃいます。要するに、こういう活動の現場に立つ人たちがここに集って、大学の研究者と一緒に勉強していると、そういうイメージを持っていただいていいと思います。

1998年に設立総会が開かれたのですが、そのときに「新しい経験知の創出をめざして」という経験知という一つのキーコンセプトが出ています。それで後、「市民研究～ボランティアから生まれる新しい知」とか、ボランタリーな活動とそれから経験知、そこが焦点になっています。

これまでの研究大会テーマとcafe連

地域学とも関係が深いものが出てくるのですが、2000年には「ボランタリー・コミュニティ」という、そこに焦点を置いて研究報告会をやっているわけです。それから、「ボランティアの世紀～希望を組織する」という、これはボランティアとは何かと、ずっとこういうふうに詰めて考えてきているわけです。2002年には「コミュニティの力」という、これがやはり地域学と非常に関係が深いですね。2003年には「大学と市民社会」という、大学と市民活動の現場とのつながり、そういうことも考えていくという。2004年には「共生の社会技術」ということです。これは技術の問題を入れて考えていこうと。技術というのはメデューム、媒体ですから、働きかける媒体です。自然に働きかける媒体であり、また人に働きかける媒体でもあるわけですね。そこに焦点を置くと。今では広い意味のアートという、そういうとらえ方をしております。2005年には「都市の協同性～「ROJI」を生きなおそう」と。これは路地に焦点を当てたのですね。路地と原っぱということが中心の課題だったのです。路地を考えるということをやりました。それから、地域の

中の「共創の文化・共生の地域～つながりあういのち」。つながりということが求められてくるというのは、つまり社会的な背景として分断が進行していると。そういう前提の中でつながりが求められているという、そういう課題に取り組んだということになります。2007年に、年次大会で、「社会的排除と市民活動」という、こういう焦点で研究大会をやったのですが、この社会的な排除ということが、このところ大きな課題になっているのです。

こういう研究大会のほかに、年に何度か若い人たちを中心にしてc a f e連というのを開いているのですね。いろんな具体的な問題を取り上げるのですけれども、例えばリストカットをしている女性を呼んできて、それでその報告をして、みんなで問題を考えると、それから葉中毒の人を呼んできて話を聞くとか、そういうことをやっています。アフリカへの、障害者とともに、またアフリカの障害者を訪ねるとい、そういうツアーの試みがあって、その報告会があるとか、そういうことをc a f e連でずっとやっています。

今年は、もちろん3. 11の大震災と福島原発ということがありました。ですから、それを念頭に置いて、遠く、弱く、小さなところからという主題で、難民状況ですね、難民の問題を考えたといつていいと思います。それは被災者であり、それからホームレスですね。これは震災の前から大きな課題だったのが、社会的な排除であり社会的な格差の問題です。これは貧困の問題が非常にクローズアップされてきて、市民社会がもう寸断されているという状況。そこに「3. 11」が入ってきたと。そうすると、復興というかけ声の中で前の問題というのを置き忘れていく。ところが震災そのもの、それから福島原発そのものが、実はそういう「3. 11」の前の問題につながっているのですね。社会的な排除とか社会的な格差とか、そういう問題と真つすぐつながっていると、そういうことを確認するということになると思います。

エッジに立つ

こういうことを前置きでお話ししたところですけれども、そうすると、ボランティア学会が取り組んできた問題というのは、やはりその時々の中での、これを私はエッジと呼んでいるのですが、そのエッジに焦点を当てて、そこに立って研究をするということです。

それが、例えば先ほどの中村先生のお話の中で、里山と里海がつながっている話がありましたが、水俣でもそうですね。水俣に非常にいい里山があり、そして里海もあったわけです。不知火海というのは内海で、本当に穏やかな海なのです。そこに平底の打瀬船を浮かべて漁をすると、そういう豊かな漁場があった海でした。だから、これは里山があつて初めてそういう里海もまた豊かであつたわけです。

ところが、そこにチツソの水俣工場が媒体として使った無機水銀、そこから副生された有機水銀の垂れ流しによって海が汚染されるわけです。それで、食物連鎖の中で水俣病が生まれたということになります。そういうことで、里山と里海という、これが里海の方からそういう打撃を受けたわけですが、その後、海が回復していくという中で、里山に産業廃棄物最終処分場をつくると。しかも、九州はおろか関西の方までのごみを収集すると、水俣の里山の中にそういう大きな処分場をつくるという話が進行したわけです。それで、まさに里山が里海を育てるということを水俣の人々が訴えて、それを撤回させたわけですね。

里山から流れている川が水源地でもあつたわけですが、それが水俣市の飲料水にもなるわけですね。しかも、その水が水俣湾に注ぐということになっているわけですから、まさにその意味では里山と里海が川によってつながっているのですけれども、その川口のことをリバーズ・エッジと

言いますけれども、川口というのは、その意味では一つの切断ということがあるのですね。これは川の先端であると。しかし同時に、それは海と川と、海と山をつなぐという側面があるわけですね。だから、川口というそのエッジというのは、その意味では、あることの世界が変わっていく先端の部分なのです。同時に、つなぐという役目もするのです。だから、社会の中でそういうエッジを考えていく。

そうすると、このエッジというのは、いろんな問題がそこにありますけれども、やはり排除とそれから生存にかかわる、そういう問題群をはらんだ場所だということが言えるわけです。それは、同時にまた、つながりの場所でもあると。つながりの分断を超えていく、そういう可能性もまたそこにあるという、そういう場所です。だから、そこにまず立つということが一つ、前提として言えることなのですね。

こういう問題は、とりわけ市民社会の内部と、それからグローバルにも、エリート層と下層労働者層との二極分化ということがあると。それで、ニューヨークのウォール街でのデモと公園の占拠という訴えが、99%の訴えだというふうに言っているとおりですね。しかし、これはアラブの春と連動しているし、世界的にそういう分極の一つのあらわれだと言えるわけです。だから、こういうところがとても大きなエッジだろうと思うのです。

いのちの形を見出す

私たちに今、「3. 1 1」というものの経験がありました。そこから考えていくと、紹介したいのは大塚愛さんという方なのですね。

大塚愛さんは福島県の川内村の山の中を歩いていて、きれいな小川に出会うのですね。それで、ここに住みたいと思うわけです。1999年に小屋をつくって、ランプと薪の自給自足の生活を一人でやっていたのですね。それで、4年間里においていて、大工について修行を積んだのです。そこにまた連れ合いができて、その連れ合いというのは建築士だったのです。2人で力を合わせて新居をつくる。そして、太陽光パネルを張ったり井戸を掘ったりする。2人の子供が生まれるのです。

そういう生活を営んでいるところに、「3. 1 1」の福島原発の爆発という出来事があったわけです。原発から24キロなのです。ですから、家族で実家のある岡山に避難するのです。そこで子供たちを放射能から守る、そういう「子ども未来・愛ネットワーク」という市民活動を始めるのです。これは自分の子供たちだけ助かればよいという発想ではなくて、すべての子供を放射能から守りたいということで、こういう活動を始めるのです。

「3. 1 1」以前から、実は脱原発ということを主張して願っていて、それでジョン・レノンの「イマジン」でフラを踊るアロハDEハイロというのですね。アロハというのは福島県に常磐炭坑があって、フラダンスを踊る、そういう場所があったわけです。有名な場所で、観光地化していたのですけれども、そこからいわばとったわけですが、フラを踊るアロハDEハイロというのを岡山でもまた再開するのですね。

大塚さんは、あの場所を失ったということは自分の命の半分を失ったようなものだと言うのです。今までお話ししてきたことというのは、これすべて失われたものなのだとするのです。そうすると、そういうものは記憶でしかないわけです。失ったものに対して、それから、あるいはこれから生まれてくる、ひょっとしてこのままの状態だったら失われるかもしれないという命に対して祈るしかない、だから一生懸命彼女は祈るのですね。この祈りの間に、多分命の声が訪れたと言っている

いのでしょうかね。

彼女は、こういう話をした最後に、「でも、いのちがあって、私たちは生きています」と言ったのですね。この言葉はとても痛切な言葉だと思います。つまり、すべてのものが失われた。そのときに、今さら人生の意味を問うということはできないわけですよね。それで、生活を復興させて、さあ頑張ろうと、そんな人ごとのようなかけ声は全く関係ないのですよね。今さら人生の意味なんてどこにあるのかと。

しかし、そのとき一つ言えることは、残された命がある。だから、人生の意味を問うのではなくて、命の方が彼女の生き方を問うと、命に生き方を問われているという、そういう感覚なのです。いわばそういう命の声を聞いた、その声に突き動かされるようにして「子ども未来・愛ネットワーク」を始めるし、それからアロハDEハイロのフラを踊るということをやったのです。彼女が実際にイマジンで踊る場面見ましたけれども、祈りに近いような踊りです、こういうことが言えるのですけれども。

ここで言えることは、本当に排除と生存、生存と死と言ってもいいけれども、そういうエッジに立った場合に、その場所にもう佇立するしかなくて、そこからもう一回生き直すというときに、この命というのはどういうふうに動いていくのだろうかということですね。

当事者起点と応答可能性

そこには、つまり他者の声の訪れがあるということなのです。それは、自然だったり、動物だったり、子供だったり、それから人間だったり、あるいは死者かもしれません、そういう声に動かされていくということです。そのことは、つまりすべてを失ったけれどもも生きていう、その人自身からその動きが始まらなければいけないわけです。当事者起点という視点がそこに得られます。それから、同時に、応答可能性、命というのはそういう声に応答するものですよね。私たちはこれをバルネラビリティーという言い方をするのですけれども。

共助とかあるいは共生、こういう関係がすべての命に向けられるということですね。そのことが、そういう共助と共生という関係を紡ぎ出すことなのだけれども、これを自分の身近なところだけではなくて遠くにまで及ぼすと。だから、遠くて、弱くて、小さいところ、そこにまで及んでくるときに初めてそれは、私たちが言う、いわゆる公共圏へ、その命が踏み出すということが言えると思うのです。

そういうことが、要するに私たちがボランティアな生き方をするというときに、エッジに立つところから始めると、ここに2-4に集約したような、ボランティアな生き方というのは四つの命の形をとるのだと。それは、当事者・市民起点であるということです、それから共助とか共生という関係に入ること、立つことですね。

そういうことをやる身体、手のわざのメデュームが必ずあります。それは、例えばインターネットとかそういうことはもちろんあるけれども、そういう手のわざが、身体が、フィジカルなものがかかわっているということですね、そういう働きかけるメディアに。それが広い意味でアートというふうに言っていると思います。

それから、もう一つの公共性、あるいはもう一つの政治と言っていいと。この場合には、二つのことが考えられると思います。それは何かというと、民意を通ず政治的回路を構築するということです。はっきりこれは政治の世界に踏み込んでいくのです。政治を回避することはできない。それから、第2に、行政に公助の公的責任を問うということです。この二つなのです。つまり共助

ということだけ言っているのではなくて、やっぱり公助という、公の支援ですよ。公の支援で国家がやらなければいけないことがあるわけですね。それを、あなたは責任を果たしていないではないかということ言うということです。そういうことを含めての、もう一つの政治であるわけです。こういうことがボランタリーな生き方のかなめの部分なのです。

地域とは

改めて地域とは、市民とはということに簡単に触れておきますけれども、地域というのは、ある場所とともに暮らす人々と生命系のことであるという、こういう非常に単純な絞り方をしました。これはもちろんいろんな要素があります。しかし、地域の核心の部分というのは、やっぱり人間なのですよね。そこに集う人々のことが生命系であると言ったのは、阿部志郎さんという福祉の先達ですけれども、その人から直接こういう話を聞いたのですけれども。そうすると、地域というのは、人がそこにたくさん集まってくるとその地域というのは膨らむし、それから人がそこから去っていくと地域は萎むという。そういう地域というのは息づいているものなのだというイメージです。それに、私は人々とそれ以外の生命系をつけ加えたいですね。今度の被災のときに、いかにたくさんの馬や牛や犬や猫が放置されたか。これも命なのです。そういうことを忘れたくないということです。

それで、一つの問いを立ててみます。放射能から避難した人々、これを私は難民と呼んでいいと思います。この人々にとって地域とは何かということですね。そうすると、避難先に生まれる新しい地域、これはありますよね。それから、サテライト地域というのがあります。福島県の人たちが例えば山形県にサテライト保育園をつくるという、そういうふうな場所です。実際、サテライト地域という呼び方もあるようです。それから、場の記憶で結ばれたネットワークがあります。これも地域です。例えば、川内村の人々、川内村には誰も住んでないけれども川内村の人々というふうに言う。そうすると、それは地域になる。それから、待望する地域ですね。

それから、難民がいる遠いところ。これは難民という言葉を得たときに、私は三つのことを思い浮かべました。一つは、今、何度か足を運んでいる釜ヶ崎のホームレスも難民であると。釜ヶ崎の顔なじみになったおっちゃんたちは、今はそういう住まいを得ていますけれども、多くはホームレスだったのです。それはいろんな場所を流れてきて釜ヶ崎に流れ着いた人たちです。それから、戦中の私は疎開世代です。疎開を経験しているのです。私は、この前数えてみたら10何回引越しをしているのですよね。本当に考えたら、これは難民だなと思いました。疎開から帰った後の生活を考えると、私自身も難民だったなと思います。それから、セバスチャン・サルガドの撮った写真でアフリカの難民の写真を思い浮かべたのです。こういうところに、難民がいる遠いところ、やっぱり重なってくるのです。地域の重層性ということが言えるのだらうと思います。

市民とは

「市民」という言葉が無規定に使ってきているのですが、「市民」というのはボランタリーな生き方をする人とのことと一応言うておくことができます。主に、まさに市民が使ってきた「市民」というのは何か。最初はこれ、小田実の定義だとデモをする人々なのです。1950年代の末ぐらいだったと思います。小田実がデモをする人というふうに言うのです。それから、このデモをする人々という定義は変わっていきます。小田実の、この「市民」の定義の改訂版というのがそこにありますように、日常生活を自発的に営む人々、すなわち自発的にというのがポイントですね。

自発的に暮らす、働く、ともに楽しむ、闘う人々といいますが、この闘う人々を入れたのは小田実らしいのですけれども。これに自治と共生とつながりを志向する人々と。NPOとか、それから、ボランティア学会だとか、そういうことを踏まえて、こういう人の志向性が入ってくるのですね。それに加えて、さらに4番目の定義です。小田実が言ったようなことにつけ加えて、自治と共生とつながりを志向する人々に、それにさらに加えて、みずから情報を集め、自分で考え、公共空間に参入する人々というふうに言えると思います。ここは、要するに政策決定とか法の制定に関して民意が反映されるような、そういう政治的な回路をつくと、そういう志向性を意味しているのですね。問題提起をして施策を行政に行わせて、それから、システムの外からそれを検証して監視すると、そういうことで市民社会に責任を果たすという、言ってみれば政治的な営み、公共権の営みを今重視しないといけないだろうと思います。

というのは、市民の両義性という問題があるのですね。中野敏男さんがボランタリーな活動というのは国家システムにとってコストも安上がりで実効性も高いシステム動員であると。だから、新自由主義国家を支える補完物になっていると。ボランタリーな生き方というのは、そういう新自由主義国家の補完物になっているという言い方を実際にしたわけです。それはそのとおりです。そういう側面があります。これは、システムを転覆する革命集団でも何でもありませんので、補完物になるという側面があるのです。しかし、湯浅誠さんの切り返しを私は支持したいと思いますね。共助というのは公助の不在を正当化するために活用されがちであるが、しかし、市民は公的責任の不在を正当化しないというのですね。私たちでさえ可能なことを、なぜ行政がやらないのか。行政にそういうふうに興議申し立てを行うという、そういうことが市民の一つの大事な仕事であるということを行っています。その意味では、システム動員されっ放しではないということですね。こういう市民の両義性ということはやっぱり一応踏まえないといけないかもしれません。

システムの政治

「3. 1 1」というのは、やっぱり非常に大きなエッジだったわけですね。ここから社会的な排除と生きにくさを生む政治のシステムが露頭のように見えてきた、露出してきたと言えると思うのです。それを踏まえないと、ボランタリーな生き方と言ってもあまり意味がない。だから、そういう私たちが社会的な排除と生きにくさ、それを生んでいるシステムの政治、そのものを見定めると。見定めた上で、それを突破する手だてを考えていくという、そういうことが必要になるわけです。このシステムの政治という言い方は、シェルドン・ウォーリンという政治学者の言葉です。これは市場原理を優先する新自由主義国家の政治ということになるのですね。ですから、自助努力だとか競争原理だとか、優勝劣敗だとか自己責任だとか、そんなのがひっついてくる。市場原理優先ということが圧倒的に中心であるような政治なのです。そういうものがやっぱり見えてくるということですね。

そういう目で見ますと、こういう社会的な排除と生きにくさというもの、これを生んでいる第一なものやっぱり生産力ナショナリズムとグローバル市場化ということだと思います。生産力ナショナリズムというのは、生産力主義というのは生産力を増せば増すほど人は豊かになり、幸福になるというイデオロギーで、かつ政策です。

これがナショナリズムであるというのは、これは全体を優先させるというのです。ですから、全体の生産力の向上を優先させるということですね。だから、GDPのようなものです。そういうものを優先させる。そういう考え方で日本の近代化の初めから、例えば富国強兵という呼び声があり

ましたね。それから、戦後の高度経済成長を通して現在に至るまで、やっぱり経済成長というのは本当に葵の御紋なのですね。これがずっと日本の近代を通して通っているシステムの政治の根幹の部分なのです。しかし、これは同時にグローバルでもあるのですね。グローバル市場化ということがそれに重なってきているということです。

三つの全体主義

それから第2に、政治支配における全体主義と生活様式における全体主義と。全体主義というふうに言っていたものですね。これは私たちが福島原発をめぐって、いわゆる東京電力という企業とそれをバックアップする九電とそれから産業界と、それから行政と、それからさらに、とりわけ学会ですよ。さらに原子炉を入れた日立、東芝、三菱重工、それからさらに設備投資を行っていった銀行とか商事会社です、そういうものが、もう一蓮託生なのですね。原子力村という言い方をするのですけれども、これはもう、まさに翼賛体制と言ってもいいのですが、それは藤田省三の言い方だと、全体主義は三つあると彼は言うのですね。

一つは、戦争のあり方における全体主義、それから二つ目に、その戦争のあり方における全体主義が政治支配のあり方における全体主義に転化していると。戦後の日本の政治支配の全体主義ということ。それに対して、第三の生活様式における全体主義というものがあると。これを安楽の全体主義と呼んだのですね。これは政治権力の問題ではなくて、まさに、これは私たちの生活様式がそういう全体主義になっているという言い方でした。それは当たっているし、それからその延長上に、「3. 1 1」があったというふうに言えると思います。それは、「3. 1 1」の前に私はやっぱり社会的な格差ということ、それから、貧困の普及といいますか、全般的な普及ということを踏まえて生活に対する不安がやっぱり社会を覆っていると思いますね。

だから、それに対する安心を与えるという、安心の全体主義ということがあったと思います。それは例えば保険の売り込みや何かで生涯の安心とか老後の安心と、そういうふう言うわけですね。これは安心と安全は区別した方がいいと思います。とりわけ、例えば被災地で大川小学校の悲劇がありますよね。あの場合に、先生たちがなぜ津波が迫っているのに子供たちを避難させなかったのか。それは親たちを安心させるためですね。親たちが引き取りに来る、それに子供を渡す。親が安心するし、親に子供を渡してしまえば小学校の方も安心するという仕掛けですよ。しかし、それは言いかえれば安心のために安全を二の次にしたということでしょうね。本来だったら、やっぱり安全を先行すべきですよ。こういうふうにして、主観的な安心の方が先行しているのです、日本の場合。実際の安全があるかないかというのは、それは二の次になっていますね。

これは石巻の日和山の高いところに保育園があるのですね。保育園のところまでは津波が来ない。しかし、送迎のバスに子供たちを乗っけて、そのバスは山をおりるのです。なぜかという、石巻の市街にいる親たちに子供を渡すためですね。親に安心してもらうと、そのことによって保育園の側も安心する。そのために津波に目がけて突っ込んでいった形になるわけです。もちろん津波がそこまで来るとは思ってなかったのかもしれないのですが、この場合もやっぱり安心という、そのために安全を二の次にしたという、悲劇的なケースだと思います。そういうところに、安心の全体主義というのがあると思います。安楽の全体主義の延長上ではあるのですが、「3. 1 1」のところで露出したのはやっぱりこういう安心の全体主義です。いかに安心という言葉が私たちの周りを取り巻いているか。

二重の植民地主義

それから、二重の植民地主義ということです。これは東北と言いかそのものが、どこから見た東北なのかということですよ。そうすると真ん中というか、中央というのがあるわけです。そこから見た東北であると。東北に住んでいる人たちは、自分たちは東北に住んでいるというのは変な言い方ですよ、どこから見ての東北なのと。自分たちが住んでいるのは真ん中ですよ。どこまで行っても、地域に住んでいるところが真ん中ですよ。でも、そうではなくて東北というところに住んでいると、住まわされると。そういうふうになっていくのはおかしいわけですね。だから、東北というのは、その意味では資源の調達地であったし、それから部品の生産地であったり、それから福島には常磐炭鉱もあったわけですね。只見川の発電所もあったと、そういうことです。やっぱり国内植民地ということですね。これは水俣だってそうです。日本の国内植民地という発想です。そこにこういう犠牲が押しつけられるのです。

さらに、もう一つの植民地主義があります。それはアメリカの押し売りです。最近押し買いというのがはやっているそうですが、これは紛れもなく押し売りなのですね。石油と原発の押し売りです。アメリカの石油メジャーと、それから原発メジャーが日本に売り込みを図るのです。1950年代ですね。通産省が主導して、1955年から石油化計画が始まるのです。アメリカの石油メジャーに押されてエネルギーの一つのイノベーションが行われるのですけれども、石炭から石油へという転換が行われます。同時に、原発の売り込みもまたあったわけですね。その結果、千葉県に石油化学のコンビナートができます。チッソもそこに石油化学のコンビナートをつくるのです。千葉県は東京圏に割と近いのです。そこにそういう石油のコンビナートができる。やや不便な福島の浜通り、そこには言ってみれば原発コンビナートが行くわけですね。これもアメリカのやっぱり原発メジャーのそれがあって、それで浜通りに集中的に原発ができるのです。しかも原発のつくり方といいますか、これは契約があって、アメリカの提供する青写真どおりにつくらなければいけないのです。電源を地下に入れると、しかもそれを海際原発の地下に入れるという、考えるとぞっとするようなことをアメリカがそういうふう押しつけてきて、それをそのとおりやらざるを得ない、そういう契約だったからですね。結局、言ってみればアメリカの植民地主義ですね。だから、アメリカのやったとおりに実際原発をつくったのであって、日本の場合に、日本で独自のことが何かあったのという質問に対して、原発を運転するときキーを押すという、これは日本人がやったことで、日本人の独自なことというのはそれだけと、そういう冗談があるのです。でも、本当に冗談ではなくて、そういう意味でこれは二重の植民地主義なのです。

隠蔽の政治／軍事化の政治

それから、隠ぺいの政治については、皆さん御存じのとおりですよ。SPEEDI隠したとか、そういうことでよく知られていることですが、これは隠ぺいであると同時に合意調達の言説操作ですね。それで、例えば福島原発で初めのころに、異常は報告されておりませんという、テレビで何度も言っていました。異常は報告されておりませんと、でも正常も報告されていないのですよ。というのは、誰も原子炉の中を見ているわけではないのであって、それで原子炉の中がどうなっているかと観測する装置もすべて壊れているわけですから。誰が見て、誰に報告したのか。そういうこと抜きで異常は報告されておりませんという、こういう言葉の語法が持っているのです。政治的な隠ぺい性というのは、これは明らかだったのです。異常は確認されておりませんという言葉も何度も聞きました。だが、それは同時に正常もまた確認されておりませんということなのです。

そういうところを私たちは見逃してはいけないと思います。

それから、軍事化の政治。一つは核兵器と原発の同一性ということ踏まえています。それから同時に、自衛隊の国民感情への内面化ということがあると思います。反原発の人であっても、例えば新聞の声欄などで、子供が自衛隊の活動を見て英雄的な活動にほれ込んで、子供が僕も大きくなったら自衛隊になると言っていると、自衛隊の皆さん、ご苦労さんと言うのですよね。そういう人が反原発の推進者なのですね。そういうことが実際にある。自衛隊の人たちの活動というのは認めざるを得ないでしょう。しかし、そのことと自衛隊がそういう国民感情の中に浸透するという事とは別問題ですね。それから、米軍のトモダチ作戦ですね。これも片仮名でトモダチと書きますけれども、これも沖縄問題と絡んでいるし、米軍の世界戦略とも絡んでいるのです。戦争体制なのです。それからもう一つ、非常に異様だったのは玉音放送ですね。あの玉音放送は何だったのという。こういうことをあわせてみると、やっぱり軍事化の政治という方向性が見えています。

社会的な格差と難民を生む、そういう統治の構造的な連続性ということがあります。これは「3. 11」以前と以後をつなぐ連続性ですね。そのことを受けとめないといけないと思います。「3. 11」によって、世の中すっかり変わったという言い方、そういう言い方をするとき流れてしまうものがある。その流れてしまうものをしっかりと受けとめたい。それから先に初めて市民の地域におけるボランティアな生き方というのを考えることができるだろうということです。

地域におけるボランティアな生き方

地域におけるボランティアな生き方、このことをお話しするのですけれども、「自分のことだけ考える生き方はでぎね」という、吉田正耕さんの言葉を引いています。岩手県の陸前高田市気仙町の73歳の方の言葉です。吉田さんは学校の校長先生まで勤めた方です。それで、それを退職した後、地域のボランティアセンターなどの事務局長をやったりして、地域づくりに非常に貢献された方です。この方が、もうそろそろ若い人たちにバトンタッチして、少しは自分の生活をしてみたいと言われていたそうです。それで、3月11日の2日前ですか、やはり大きな地震があったのです。そのときに吉田正耕さんの奥さんがこういうふうにしたそうです。大きな地震が起こったら、預金通帳と判こを持って逃げようねと正耕さんに言ったそうです。そうしたら、この正耕さんが「自分のことだけ考える生き方はでぎね」と言ったのだそうです。実際にその2日後に、3月11日にこの地震が起こり、そして津波が起こる。それで、正耕さんは小学校の門前で避難するように人々を誘導していたそうです。最後に正耕さんの姿を見たという人は、正耕さん自身が両手に1人ずつの、つまり2人のお年寄りの手を引いて懸命に避難しようとしている、そういう姿を見た人がいるのです。そのことを奥さんに告げたそうです。そういうふうにして結局亡くなくなりました。自分のことだけ考える生き方はでぎねと、吉田正耕さんは自分も助かるともちろん思っていたのですよね。どうかかなと思しながら、自分も助かる、でも、この年寄りも助けたいという思いで行って、それで亡くなくなりました。これは自己犠牲という問題ではないということですね。そういうことを言いたいのです。吉田正耕さんだっただけ自分が生きたかったですよね。

「溜め」と「目地」

生きにくさの現場を生きる当事者、市民は、「溜め」と「目地」をつくるのが喫緊の課題となる。それはそうです。生存がかかっているわけですからね。この「溜め」というのは、湯浅誠さんの言

葉です。湯浅さんが言うには、「溜め」というのは金とか家族とか友人とか自信などだということです。これに「目地」という言葉をつけ加える必要あると思っております。「目地」というのは未決の領域であると、遊びの部分ですね。例えば建物の木と木を組み合わせる部分です。これをきっちりやってしまうとひびが入ります。だから、遊びの部分が必ず必要になります。タイルをはる場合もそうです。タイルをびっしり敷き詰めると、ちょっとした地震でひびが入ってしまいます。タイルとタイルの間に遊びの部分をつくる、そういうことが必要になります。そういう遊びというのは、その間であり、つながりであり、安全、セーフティーネットになるわけです。そういうものをつくるのが喫緊の課題になる。それから第2に、生存のふちに立っている、生存のエッジに立っている、そういう人のほとりに立つ。自分のことだけ考える生き方はでぎねという、そういうときに、そのほとりに立つということがあります。

ほとりに立つーアシストのあり方

その立ち方ですけれども、それをソムリエ論で考えたいのです。もともと田崎真也という有名なソムリエが、薄っぺらい文庫本ですけれども、『サービスの極意』という本を書いているのです。その中で、ソムリエというのは、ホストを歓待してはならないというのです。今、バーにいますし、ソムリエがいます。そこにホストが入ってきます。ホストがゲストを連れてきます。そういうときに、ソムリエはゲストにサービスしてはいけないというのです。それはホストがゲストを歓待するのです、もてなすのです。そのことをソムリエはアシストするだけであると。だから、歓待という言葉、ホスピタリティーという言葉をここで使えらると思えますけれども、そのことは医者と患者についても言えるわけですね。患者がいます、医者がいます。患者が自分を歓待する、患者が自分をいやしていく。そのことを医者というのはアシストするという構図です。

ですから、ソムリエのところ、例えば市民というふうに入れます。右のとおりです。受苦者がいる、苦しみを受けている人がいる。この苦しみを受けている人が自分を受け入れていく、自分を再生していく。自分の自律を図っていく、自分を救い出していくという、そういう横の線ですね。これに対して、この市民ができることはそういう受苦者の、苦しみを受けている人の営みをアシストすることができるわけです。市民主体というのはこういうことになるわけですね。

田崎真也のソムリエ論から一般的なそういう人間のアシストの仕方について話を持っていたのは石川准さんという全盲の社会学者なのです。その人がこういうソムリエ論、障害者をアシストすることという、そういうときの図式で使ったのです。これは左だけだったのです。でも、これは右のように相互的なものになるのですよ。アシストしている人、市民が、また苦しみを受けている人からこういうアシストすることで自分がアシストされているのです。自分がもう一つ別の自分へと、自分が自分を確認していったりするのです。新しいところへ踏み出していったりするのです。そういうことが、苦しみを受ける人の共助ということによって、右のような相互的な構図が生まれるのです。

それから、地域づくりというのは、これは当事者・市民起案でということが言えると思います。岩手県の大槌町の町内9地区ごとの協議会、それから若者プラットホームがあります。こういうものが住民会議を開いたり、地域の共同の整備づくりなどをやっていく、こういう形で当事者、市民起案で地域づくりをしていくということです。

しかも、こういうボランタリーな生き方のポイントというのは、先ほどみたいに市場原理を中心にする、そういうシステムの政治の構図に、ある意味で逆らう形になりますので、しかし、決して

市場原理の外に私たちが抜け出て生きることができないわけですよ。ですから、その市場原理が支配的な世界に暮らしながら、なおかつ共生的なものをどういうふうにして広げていくのか、そういうことにボランティアな生き方というのは焦点を定めていると言っていいと思います。それは、いちむらみさこさんというホームレスのアーティストの言い方だと、「すき間にねじ込み、ぐわっと開く」というのです。そういう言い方をしていますが、とてもよくわかる言い方です。

ヴァナキュラーな共生の形—異交通・までい・もやい

それからさらに、こういう生き方を広げていくときに、当事者と市民はヴァナキュラーなものによって共生を構築していくというふうに言えると思います。ヴァナキュラーというのは、「土着の」と訳されますよね。地に着くこと、その地に固有のものという意味です。ともに生きることというのにも含まれている。だから、イヴァン・イリイチのこのヴァナキュラーなものの定義というのは、互酬によって営まれている暮らしというのです。互酬によって、つまり共助によって営まれている暮らしだと。

私は高島に学生たちを連れて援農合宿を張りましたし、それから高島のお百姓さんたちに大学に来てもらってゼミに出てもらったり、講義を聞いてもらったりします。単純なことを小難しく言うとか、そういうコメントをもらったりしていて、ちょっと手に負えないお百姓さんたちでした。そういう人たちは「結」と「講」が生きているのです。それから「延長家族」という。血のつながりはない人たちを延長家族のようにして受け入れるのです。他者の歓待と、これは実際、高島が外部から人を受け入れたのはもう100名を超えているのです。そういう人たちを受け入れて、開かれている地域です。

それから「異交通」といいます、これは双交通と区別しなければいけないと思います。異交通というのは、コードが異なる者同士がコミュニケーションをするということなのです。これはすごく重要なことです。というのは、外から入ってくる都会の人が多いわけですが、その都会の文化を持って入ってくるわけですね。その人たちと、それから、こういう高島のずっと農業やっている人たちとがコミュニケーションをする。実際コミュニケーションが成り立つのですけれども、これは言葉によってだけではないですね。こういう至るところで、そういう異交通の持っている重要性、その創造性、クリエイティブなもの、そういうことが言えると思います。実際に外から入ってくる人たちの刺激でまた高島が活性化するという、そういうことが実際あるわけです。

草木供養塔というのがシンボルになっています。これは江戸時代からあるそうですが、草木に命を認めて、それに手を合わせるのです。草木供養塔というのは、広く日本全国を見渡しても置賜地方にしか見られないそうです。その後、高島に学んで新しく草木供養塔をつくっていったという人たちがいるようです。

それから耕す文化と手仕事、これを教育の課程にも入れてくるのです。それから自立する百姓。万能人ですよ。自分の家さえ建ててしまいます。有機農業の持っているヴァナキュラーなもの、そういうことがあります。それから、御存じの方も多いと思いますが、「までい」というのは、「真手」というのは真実の「真」に「手」と書くのです。これは両手という意味だそう。そこから転じて、手間暇かけて丁寧に何かをやることという意味だそう。だから、スローライフのことなのです。「までい」でと、これは日常語になっているのです。「子供のしつけはまでいによれ」と言うのです。それから、「までいに飯を食わねいど、罰当たつ」というのです。罰が当たるぞと。「までいに飯を食う」。丁寧に時間をかけて物事をやるということなのです。だからこれは

労働生産性を低めることになりますよね。そのかわり時間をかけて丁寧にやる。そうすると人手も必要になるのですね。だから、雇用が増すということになりますよね、「までい」でやると。そういうことであります。

水俣の場合には、「もやい」という言葉を用いていますね。船と船をつなぐ、船を岸边につなぐというときに「もやう」。だがこれは水俣では、「もよう」という動詞で使いますね、よく使うのです。例えば、「お寺にもようて行こうもんな」と言うのですよ。お寺に連れ立って一緒に行こうよと言うのですね、これは日常語です。

飯館村は『までいの力』という冊子を出しています。『までいの力』というのは、3月11日以前につくられていて、むらづくりを「までい」でやろうという、そういう取り組みだったのです。それを出版する寸前に3月11日になったのです。だから、その3月11日があって、いっそう「までい」でやろうという、そういうことの意味が大きくなったと言っています。

「もやい」もそうですね。日常語なのですが、この中から拾い出して行って、これを人々が患者の中の「もやい」をやろうと。患者と市民との間の「もやい」をやろう。患者と、それから水俣市民というのは、もう水と油だったわけですね。本当に断絶があったのです。そこを患者の方から「もやい」をやろうと言いつけ出すわけですね。こうして水俣の地域づくりが今始まろうとしているわけですね。これはヴァナキュラーな言葉を用いるということなのです。

同じようにして、この当事者、市民というのは分断された人々と生命系をアートでつなぐというのです。そのアートの特徴というのが、幾つかやっぱり共通点がありますね。やっぱり手のわざなのです。それが共助やつながりになっていく、そういうものであるわけです。

公共の概念を組み替える

ボランティアな生き方というのは、公共性の概念を組みかえるということになります。公共性という、今まで言われているのは要するに公論の次元だけなのです。公論の次元だけで熟議の民主主義とか何かそういう言い方が通っているのですけれども、そういう横文字を縦に直しても何の始まりにもならないのです。公論の次元、これをこういう当事者、市民、例えば水俣病患者のようなそういう人たちのことを考えてみると、デモとか座り込みとか占拠というフィジカルなものも、こういう公論の次元に入れていいのではないのでしょうか。実際に今、福島のお母さんたちが経産省の前で座り込みしているのですよね。この座り込みというのは、もうそういう公論の次元だと考えていいと思うのです。

それから、公的な決定の次元です。ここには当事者、市民が起案するし、また決定過程にも参加しなければいけないのです。行政への公助の提案というの、やっぱりここから出てくる。公益の考え方が一番大きく変わったところだし、変えなければいけないところです。例えば、電力は公共性と言っているわけですよね。そう言われると、はははとなるわけです。この電力は公共性というときには、成長とかそういう文明化とか近代化だとか、そういうことが公益というふうになる、そう言われる前提があるわけですね。しかし、そうではないだろうということです。例えば北海道の伊達で火力発電所をつくらうとしたときに、お百姓さんと漁師たちが追い立てを食う、そのときに裁判官が実地検分に来たのです。そのときに、北海道電力の言い分というのは、電力は公共性と言うのです。葵の御紋なのです。それに対してお百姓さんたちが、安全でおいしい食べ物をつくるというのはもっと大事な基本的な公共性ではないのかと、こう言ったわけですね。それは、公益についてのもう一つの公益を申し立てたことになります。これは福島原発のことがあって、一

層その意味の成長ということとかかわりがなく、むしろ「までい」に近い方の価値なのですね。これが公益として考えられるということになると思うのです。

当事者、市民のボランティアな生き方の課題というのは、政策課題と切り離せないということですね。だから、ボランティアな生き方をしている市民が政策課題を国家にやれと言うわけですよ、行政にやれと言わなければいけない分があるのですね。ボランティアな生き方をしている人たちが、自分たちだけで共生という領域をつくっていくというだけではだめなのですね。そうではなくて、そういう公助の領域を強く主張していくということが必要になります。

最後に、一つの地域の生活には無数の遠い地域の人々の生活が交差してグローバルな関係のネットワークを構成していると。だから、自分の着ているもの、食べるもの、これ一つずつ点検してみても、ありとあらゆる世界中の人々がそこに交差している。自分の身体にそういう遠いところの人々が織り込まれていると言ってもいいのではないかな。そうすると、日本の市民が遠く小さく弱いところから実際は収奪している、ほとんどそうですね。そして、グローバルな富を占有して生きているということが言えるので、遠く小さく弱いところに生起する問題に責任があるし、そこをつながり直す、そういう責務があるのではないだろうか。これがボランティアな生き方の、最後に置きたいところですね。

何のための地域学か

何のための地域学かということになりますけれども、時間がないので、これ端折りましょうか。やれやれと、けしかけられています。

この『地域学入門』を読んで、本当にボランティア学会でやってきたことと一緒にだと思ったのですね。これは柳原さんの最初の集約の部分のところで行われていることですが、一人一人の生の充実、生きやすさですね。つながりの実現を空間的な枠組みを通して考えると、そこに地域学の独自性があると。一人一人のという、これが大事なところですね。例えば原発の被災に対する賠償金というときに、一律ということになりますよね、一人一人ではないでしょう。一人一人のという、そこに焦点があるということ、これはものすごく大事なことだろうと思います。同時に、その空間的なつながりだけではなくて、時間軸上のつながり、時間軸上の共生ということも大事になるのです。先ほども言いました、大塚愛さんのように亡くなった人との共生、そういうことがありますね。祈りというのはそういうことです。亡くなった人との共生。それから未来の、これから生まれてくる子供たちとの共生と、時間軸上の共生まで含めて考えたいですね。

地域学の視点は四つ、これはそのとおりでしようと思います。分析的、客観的な構造的視点、それから生活から考える視点ということですね。それから、「わたし」の「今、ここ」から考える「わたしへの再帰的な視点」と。これは仲野さんの文章ですが、私はずいぶん揺さぶられた文章でしたが、私への再起的な視点、これは非常に大事なところですね。地域学をやっている私というのは何なのか。これを問わないで地域学というのはできないでしょう。だから、人間は移動する存在と見て、人と地域との関係を考える、移動する視点ですね、まさに。これは、本当に人はすべて難民であると言ってもいいくらいですね。この現在の「3. 11」以降の人のあり方というのは、ほとんど難民と言ってもいいですね。難民が移動する、そういう移動する視点という、これはものすごくアクチュアルなことだろうと思っています。

田中正造の信玄袋と谷中学

地域学を考えるときには、やはり田中正造が提唱した谷中学、ここを問い直すということが大事だろうと思うのです。ところが、田中正造は谷中学とは何かということは全然書いてないのですね。だから、いろんな断片から類推するしかないのですけれども、彼がどういう状況の中で谷中学を提唱したかという、谷中村民が生きるか死ぬかのエッジに立っているわけですね。その場所でのことなのです。谷中村全体が水の中につかまってしまって、その中で国家に抵抗しながら生き延びていく。その姿をこの谷中学という学問を構築して、それでそれを教育課程に乗せて、それでやっていくという、そのことの構想というのか夢想というのか、その中で込められたことは、やっぱり自治と共生ですよ。それに満ちている生をつくり出すためです。それを谷中村の村民がみずから構築すべき学問として提唱されたのですね。誰か、東京帝国大学の学者を連れてきて、それで研究してもらおうと、そういうのではないのですよね。谷中村民みずからがということです。やっぱり排除と生存のせめぎ合うエッジに立つからこそ根源的な思考が必要になるし、同時に実践理性もまた必要になるわけです。田中正造が提案している谷中学の中に、倫理の問題と政治の問題が、研究と教育が求められているということです。

田中正造の残した信玄袋の中身というのがあります。これは彼が河川調査報告書を出版するために資金集めに歩いている。歩いている途中で、体のぐあいが悪くなるのですね。彼は胃がんだったのですけれども、それで苦しいので、彼を支援している人の家に転がり込むのですね。そこで手当てを受けるのですけれども、そこで亡くなるのです。彼が持っていた信玄袋があって、その中身が知られているのです。それは聖書と、明治憲法とマタイ伝をとじ合わせたものです。それから、河川調査報告書です。これは手書きのものです。それから小石が幾つか。それから、不思議なことにカワノリということが伝えられているのですね。これはカワノリというのは、きれいな水でないのとれないそうですね。だから、こういうものがあらず、何を語っているのかということですね。聖書は、これは神であり、隣人愛であり、共生ということであり、あるいは倫理でしょう。それから、明治憲法は何といってもやっぱり自治と民権です。それから、マタイ伝は義ですよ、その合本という。それから、河川調査報告書は、環境とか暮らしとか公共性と言えらると思います。河川の持っている意味ですね。それから小石、これは何で小石が詰まっているのかということになるのですが、きれいな美しい小石を集めるのが彼の唯一の趣味ですね。歩いていて、ふらっといい小石を見つけると、それを拾うと。それからカワノリです、自然との共生。こういうことが彼の多分、谷中学と結びついているのではないのでしょうか。非常に象徴的な信玄袋の中身です。

課題責任—生きにくさを生きる当事者として

それから、先ほどのボランティア学会の三つのキーワードという中で、市民主体の研究というのがありました。実際、当事者、市民を研究の客体でなくて、研究の主体として構築するところに地域学のやっぱり画期的な新しさがあるし、また、そこに可能性もあるのではないかとことですね。そうすると、それに対して、ではアカデミズムの地域学はどのようにして、こういう市民との関係というのを取り結ぶことができるか。そのときに地域学者もまた市民の一人であるという、そういう視点。だから自分を問い返すという視点がそこにまた入ってくるわけですが、そのことによって、地域学というのはそういう総合性の中でまたさらに深まっていくし、新しい形で持てるのではないかと思います。ですから、そのところを地域学は生きにくさを生きる当事者、市民のボランタリーな生き方に肩を並べる課題責任があると。

課題責任というのは、これは水俣病患者の緒方正人の言い方です。石牟礼道子さんに依頼して現代『不知火』を書いてもらって、それを奉納上演として水俣の埋立地で上演したことがあります。2004年8月28日でしたけれども、薪能としてやったのですね。そのときに事前に新作の『不知火』のワークショップをやりました。その第2回で緒方正人と私が対談したのですけれども、その席上で緒方正人が課題責任ということを言い出したのですね。

今まで水俣病をめぐる、チッソは加害者、患者は被害者だと、そういう二項対立でやってきたし、実際それが裁判では必要なことなのだと言うのですね。しかし、裁判を超えたところで倫理の問題としていうと、チッソがより人間として救い出されるということがなければ患者もまた救われたいと言うのですよね。人間として謝れということはずっと言ってきたけれども、一度として人間として謝ってもらったことがない。そういう中でお互いに人間性を取り戻すとか、人間であると、人間の方へ救い出されていくためには両者が肩を並べて共通の課題責任を負って何かをするということではないのという、それで能『不知火』の亡くなった霊に対する奉納上演、これを埋立地でやると。これをチッソに呼びかけるということをやったのですね。実行委員会があって、実行委員会に私も入っていたのですが、そこにチッソの若い人などが参加して、それで患者たちから、真っ昼間からこんな実行委員会などに出ていて、おまえ首になるぞとかかわれていたのですが、現場のところでは課題責任というのは実際に達成されていたと思うのですね。そのことによって加害と被害という、そういう別を超えて乗り越えていくことができる、そういうことが幾つ場面の中であるわけですね。

共生のポリティクスの構築

それから、システムの政治の統治と支配の構造を批判的に洞察し、それからの離脱の戦略を含む対抗的なつながりと共生のポリティクスの次元を構築する。つまり、政治の次元が必要だということになります。それから、イヴァン・イリイチの遺言とも言えるものがあります。それは「善なるものが制度化を通して最悪なものになる」ということです。これは、ボランティア活動がしばしばそういうふうになるのですよね。ボランティアな生き方、それ自体は善なるものだ。実際、当事者もそう思っているし、しかし、それが最悪のものに転化する場合があるのですね。そのことを忘れてはならないだろうと。そうすると、最悪なものになるのを食いとめるのはどのようにするかということになるのですね。こういう限界設定というのを施す。そこから引き返すということがあってもいいということですね。

例えば原発はそうですね。原発というのは、これはもともとアメリカの政治家が広島に原発を寄附しようと言い出したのですね。広島に原発を寄附する。それは平和利用のつもりで、平和の象徴として広島に原発を寄附しよう。そういう核爆弾の悲劇があった、その広島に平和利用の象徴として原発をアメリカが日本に寄附しようというふうに言い出したわけです。そのときに、これは善なるキリスト教精神の賜物であると言ったのですね。それで、当然のことですが広島の人たちの猛反撃を食らって、広島に原発をとというのは引っ込められたのです。しかし、核兵器ではなくて原発は平和利用、これは善なるもの、しかも、キリスト教の精神にのっかってという、こういう発想が背後にあったわけです。その原発がいわば日本に押し売りされたわけでしょう。そうすると、そのときにそれを受けとめた人たちもまた、将来の核兵器ということを念頭に置きながら原発をつくっていくという、そういうことが進行したわけですね。だからこれはもう、そういう平和利用という点からしても、善なるものです。それが最悪のものに転化したという今の福島原発の問題です。

地域学の分析と記述のあり方—散種（分散）と体系化

誰のための地域学かという問いとナラティブ、これは考えられていいところですね。分析と記述の仕方、どういうふうにあるべきか。「散種」、この種を散らすという分散型のことと、それから体系化ということと、そういうことを考えるのに、きだみのるの『につぼん部落』の再読というのはなかなか意味があると思います。例えばオコンねえさんの話がありますね。オコンねえさんという何でも屋さんがあるのですね。きだみのるがあるとき、卵を買いに行くのです。オコンねえさんが、何で卵を買いに来たのかと言うのですね。そういうふう聞くというところが変わっていますけれども、そうすると、娘が風邪を引いてしまったと。だから栄養をつけさせようと思ってと言ったら、オコンねえさんは、持ってけ、持ってけと言って、卵をただでたくさんくれたというのですね。また別の機会に、きだみのるが卵を買いに行く。そうすると、何で卵を買うのかと。原稿料が入ったもので、卵酒で一杯やろうと思ってと言ったら、ふだんよりもっと高い値段で売りつけられたというのですね。これは、おもしろいでしょう。つまり、市場原理をある意味超えているのですね。でも、この超え方というのは前の方と後の方というか、つまり市場原理以前というよりも、むしろ贈与とか歓待のレベルの話と、それから超資本主義、強欲資本主義みたいなところもあるわけですね。だから、こういう両面性が実際に14〜15軒のこういう部落の中で営まれている。

このことはその地域の固有性ということと言えるかもしれないけれども、同時にそれがかなり普遍的な側面に届いていますでしょう。だから、地域のことを扱いながら、かつ地域を超えていく、そういうことについての分析と、さらにその記述ですよ、そのあり方がとてもいいと思います。しかも、オコンねえさんの話というので、これを人が読んだらもう忘れないです。非常にこれが散種になっていくということが言えるのですね。だから、こういう『地域学入門』について、いろんなことを学ばせてもらったと思っています。

どうもありがとうございました。(拍手)

■福田(司会) 栗原先生、どうもありがとうございました。

質問の方は、先ほど申し上げましたが、これからの第2部の方で受け付けたいと存じます。それでは、これより15分間の休憩に入ります。第2部は、16時55分から始めさせていただきますが、袋の中に今回の大会のアンケート用紙が入っております。できるだけお答え下さいませよう、どうぞよろしくお願いいたします。

[休憩]

第2部 ディスカッション

■福田(司会) それでは、これより第2部のシンポジウムにまいります。

御講演いただきました中村先生、栗原先生におかれましては、お疲れのところ申しわけございませんが、引き続きよろしく願いいたします。

そして、シンポジウムを進めてまいります本学地域学部の先生方を御紹介申し上げます。コーディネーターを務めていただきますのは、地域政策学科の家中茂准教授です。よろしく願いいたします。(拍手) パネリストとしまして、地域政策学科、仲野誠准教授です。(拍手) そして、地域教育学科、児島明准教授です。(拍手) 地域環境学科、永松大准教授です。(拍手) そして、地域文化学科、柳原邦光教授です。(拍手) よろしく願いいたします。

それでは、ここからコーディネーターの家中先生に司会進行をお願いいたします。

■**家中** 家中です。よろしくお願いします。皆さん、大変熱心に聞いていただきありがとうございます。栗原先生、中村先生、お二人とも今のお話からもわかるように、大変お忙しくて、お二人と一緒に地域学部に来ていただける機会をつくれることもなかなかないので、どうぞたっぷりお話ししてくださいと私の方でお願いしてしまいましたので、時間がおしております。

これから6時半までこのパネルディスカッションを進めたいと思います。まず、パネリストとして登壇した4人の地域学部の教員の方々から、基調講演をなさったお二人に、自分自身の関心にもとづいてどう受けとめて、どのように深めたいか、考えたいかという御質問やコメントをしていたらと思います。それに対して、お二人からまたお答えをいただきます。つぎに、今日1時半から始まりまして、ずっとフロアの方には聞いていただく一方だったのですが、フロアの方々から御質問を受けたいと思っています。基調講演のお二人、あるいはそこに登壇されている4人の学部の教員の方々、どちらでも結構です。それに対してまた御回答をいただきます。さいごに、私たちがこれまで8年間にわたって構想してきた地域学について、それは地域学をどうとらえるか、どう進めるか、どういった方向にするかという試行錯誤のもとでここまでやってきたわけですが、皆さんも気づいているように、まだまだ足りないこと、もっと広めなければいけない分野がさまざまにあります。そういうことについて、この各学科の4人の教員の方々から、今後の展開をこう考える、こういう必要性を考えるというお話しいただき、また、フロアの方からも、とくに学部の教員も多くいらっしゃると思いますので、御自身がそれぞれ必要と思われる取り組み、深め方などについてお話しただきたいと思います。そういう流れで問題関心を全体で共有して、オープンエンドになりますが、結論として何かまとめるということにはならないと思うのですが、パネルディスカッションを進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

では最初に、地域政策学科の仲野先生の方からお願いいたします。

■**仲野** 地域政策学科の仲野と申します。よろしくお願いします。お二人の先生方のお話から受け止めたことを10分で述べろということですが、繰り返しになることもあるかと思いますが、感想あるいはコメントと、そしてお聞きしたいことを申し上げたいと思います。

当事者性の獲得や他者への出会いはいかに可能か

私自身は、これまで在日外国人であるとか、あるいは、栗原先生とこの間、釜ヶ崎でお会いしたのですが、釜ヶ崎の日雇い労働者や野宿者たちであるとか、あるいは広島市の被爆者の方であるとか、あるいは以前バングラデシュにいたことがあるのですが、いわゆる南北問題に関心をもってまいりました。さっきの言葉を使いましたら、「遠く弱く小さいところ」から、そういう人たちと出会いをとおして人のコミュニティーとか人間のつながりのあり方を考えてきました。そこでそれぞれお二人の先生方にお聞きしたいことは、たくさんあるのですが、時間もありませんので簡潔に申し上げます。

まず中村先生のお話をうかがい、昆虫学者、昆虫を専門とされていた方のお仕事のダイナミックな展開にすごく圧倒されました。その展開の仕方の迫力を中村先生のお話から感じたところです。それを理解するにはもっともっと時間がかかりそうなのですが、とにかく圧倒されました。

次に栗原先生のお話からは、水俣や高島で、すごく長い間、そこで苦勞されておられる人々とともに考えてこられたことの厚みとか力というものを強く感じました。

お二人のそれぞれ事例は違うのですが、やはり感じたのは、時代の要請というか、この時代を生きるためにこの時代に求められている課題をどう乗り越えるかとか、あるいはそれをどう解決して

いくかという背景を真正面からしょっておられるということです。例えば里山、里海の現状でありますとか、あるいは今の社会のシステムにおける社会的排除とか分断、そういった大きな問題を背景にして、それを具体的にどうしていくのかという、この時代の課題への向きあい方を学んだように思います。

そこで思ったのが、そういう時代状況を背景にしながら、学問がどう役に立つのか、あるいは知識を生産するのは一体誰なのか、あるいはそれは一体誰のための知識なのかという問題です。そういうところをずいぶん考えさせられました。確かに様々な試みによって回復していくのは地域かもしれませんが、もしかしたら回復するのはむしろ大学かもしれないとか、あるいは研究者が回復していくのかもしれないとも思いました。さっきのソムリエ論などもおそらくそういうことかなと思うのです。現地でやるとか大学を飛び出すということ、あるいは地域の人々と考えるということ——その共助性を強く感じました。一体どちらが実は助けていて、そしてどちらが助けられているのかわからないという相互の関係のあり方がすごく伝わり、私はそこを強く受けとめました。

それはすなわち、さっき話題に出た「地域を越境する」とか、あるいはインターローカルということかもしれません。あるいは里山と里海という関係のことでもあるでしょうし、循環していく関係、大学から飛び出すということ、あるいは能登から出て能登に戻るということでもあるでしょう。あるいはさっきも申し上げましたが、遠く弱く小さいところに対する責任のあり方とか、そしてそれがまた私自身に内省的に返ってくるようなメカニズムについても考えさせられます。そしてそのような状況で親密圏から公共圏を立ち上げるといったような、そういういろんなつながりとかネットワークがうまれてくるということなのでしょう。あるいは地域の重層性に注目することも大切だと思いました。つまりこの目の前に見える地域だけを表層的に考えていてはわからないことがあるということに気づくことの重要性です。それは目の前に見える地域はその外部と複雑につながり合い、重層的に重なり合っているという認識が大切だと思いました。この私自身もおそらく同様ですよ。私というものは、さっきもお話ありましたが、亡くなった方、御先祖様たちとか、あるいはこれから生まれてくる人たちがたくさん織り込まれており、そう認識するよって、私自身がここにいるという責任を自覚できるということを感じました。

先ほども申し上げましたが、そうすると、問われるのは一体誰か。大塚愛さんの祈りのお話が先ほどありましたが、それによれば、命から私が問われているということです。私も『地域学入門』の本に書かせていただいたことでもあるのですが、私たちは、自分の研究でもそうですが、つい外国人を対象化して問うてしまう、マイノリティーを対象化して問うてしまう、あるいは地域をどうするかと地域を対象化して問うてしまいがちだと思うのです。しかし実は地域から問われているのは私たちではないか。あるいは外国人なり被爆者なり、そういう受苦者あるいは弱者と呼ばれている人たちから問われているのは、私たち自身ではないか、というもうひとつの問題が見えてくるのではないかと思います。繰り返しになりますけれども、お二人のお話からはそういうことをずいぶん感じました。

ただ、他者と出会うとか、あるいは他者と出会い直すと——すなわちそれは自分自身と出会い直していくことだと思うのですけれども——そういうことの困難も同時に感じました。なぜならば、他者という人は、忘却されるからこそ他者であるというか、私たちの目にはもう触れることのない、私たちの視界に入ってくることのない人たちだから他者なのであって、それはすなわち私たちが忘れてしまう存在だからです。あるいは地域もおそらくそうだと思うのですよね。地域というのは、忘れてしまいがちな存在ではないでしょうか。たとえば地域に宝が眠っていても私たちはなかなか

気づかない。あるいは忘れてしまうことによって私たちの秩序が成り立ってしまっています。もしそうだとしたら、そのように忘れてしまっていることすら忘れている他者と出会うということ自体がそもそも根源的に難しいことだろうと思います。それは私が経験したことであります。足元の宝に気づく、あるいはその村で暮らしている人たちの力とか知恵に気づくということ自体がすごく難しいのではないかとことです。

そこで質問させていただきたいと思います。その最初のハードルと言ったらいいかのかもしれませんが、当事者性をいかにしたら獲得できるのか、あるいは今まで私たちが忘れていた他者にどうしたら出会うことができるのか、ということをお伺いしたいと思うのです。もちろんハウツー的な質問をしているつもりではありません。このことについて先生方御自身の御経験とも絡めながら少しお聞きできたらなと思います。別の言い方をすれば、それはエッジへの立ち方と言ってもいいかもしれませんですね。またこれは先ほど中村先生のお話にもありました、ボランティアの高齢化とか、学生の無関心とか、そしてそれに対して能登の人たちはより切迫感があるといった、温度差の問題話でもあると思います。そのような状況下、どうやったら私たちは当事者性を獲得できるのだろうか、あるいは地域の問題とか他者の問題を私自身の問題として、問いとして自分の中に取り入れていくことができるのか。当然、これからの希望として若者同士のリンクがつくられているとか、いろんなネットワークができるということをいろいろ語られましたけれども、私が気になったのはその辺の根源的な問題です。すなわち他者にどうやったら出会えるか。自分自身が当事者性をどう獲得できるか、ということです。

できましたらお二人の先生御自身がどのような経験をされて、変容されてきたのかを教えてくださいと幸いです。その固有の御経験というのは、おそらく私たちの可能性でもあると思うのですよね。ですから、栗原先生の御経験、中村先生の御経験を私の中に織り込みたいと思います。

以上、やや抽象的な質問かもしれませんがどうぞよろしくお願ひします。もちろん何か具体的な答えを求めているわけではなくて、何かヒントになるようなエピソードをご紹介していただければ、大変興味深いと思いました。うまくまとまりませんが、とりあえず以上です。

■家中 ありがとうございます。御質問なりコメントに対する回答はまとめていただこうと思います。1対1の対応の御回答というわけでもないと思いますので、ここで思索を一緒に深めていきたいと、そういうやりとりとさせていただきたいと思います。では、児島先生、お願ひします。

■児島 地域教育学科の児島と申します。私は教育社会学を専門としていまして、基本的に社会学的なものを見方をしてきました。ですから今日は、とりわけ自然科学に関する話を私自身がどういうふうを受けとめることができるのだろうかということについて一抹の不安を覚えながら、講演を聞かせていただいていたいました。

積極的な受動性ということ／他者との葛藤・痛みを含んだ共助・共生

最初の中村先生のお話の方は、新たな、知らない世界を一つ一つ教えていただくような形だったので、そういう意味で非常に刺激的でした。他方、栗原先生につきましては、私自身が外国人労働者でありますとか、栗原先生のお話の中で難民という言葉がありましたけれども、まさしく文字どおりの難民の子供の教育支援にかかわって来ましたので、自分のそうした経験を思い起こしながら、一つ一つの言葉をかみしめていました。

ただ、最終的には、お二方のお話には驚くぐらいに共通したところがあったなというのが率直なところ。聞きしながら、自分の中に二つの言葉が浮かび上がってきました。一つは、受動性

という言葉です。受け身的であることということ。もう一つは、先ほど仲野先生の言葉にもありましたが、当事者性ということでした。受動性という言葉につきましては、例えば学生に対して「君は受動的だね」というときには、必ずしもよい意味では用いられているわけではなく、どちらかと言えばマイナスの意味合いで、つまりもっと積極的になれという意味合いで用いられると思います。けれども今日のお話からは、そうではなく、受動的であるからこそ現実に向き合ういろいろな視点を獲得することが可能になっているということを非常に強く感じました。

中村先生のお話の中で、生物多様性という問題が、地域の課題にどう結びついたのであるかということについて不思議な思いをしていました。ですがお話をお聞きするうちに、実は生物の多様性を考えるにあたっては、そもそもその生物が生きている地域を考えないわけにはいかず、地域の衰退は研究によって立つ足場そのものの揺らぎに直結する問題なのだと私なりに理解することができました。そのように理解したとき、自然科学というのは、どちらかという自然に能動的に働きかけていくという側面が強いように思っていましたけれども、必ずしもそうではないということをし考えました。もしかすると、例えば昆虫の生物的な多様性について科学的に調べる行為そのものの中に、実は積極的な意味での受動性というものが含まれているのかもしれない。受け身的な立場をあえてとるということを可能にする要因が、自然科学の中にもともと何かしらの形で含まれているということはないのだろうかということ、つらつらと考えたりもしていました。

そして、栗原先生のお話の中でも、この受動性は、最初から最後まで一貫してキーワードだったような気がしています。例えば最後に「まदै」ということについて話されました。積極的に環境に働きかけて、てきぱきと物事を進めていくのとは真逆の、ゆっくりと時間をかけて、手間暇かけて物事を行っていくことの大切さについてのお話でした。これは、自らが受動的な存在であることを引き受けていくプロセスの中で出てくる話なのではないかという気がし、受動性が持っている能動的、積極的な意味合いについての思いを深くしました。

当事者性は、そのことと強く関連しています。社会学をやっていると、研究者自身も研究対象とともに社会を構成するメンバーであることを確認する機会が割とありますので、人と人との関係における当事者性ということについて考えることはこれまでもそれなりにあったのですが、中村先生の話の場合には、まさに昆虫が生息する地域が問題で、その地域に研究者自身も立っている。そして地域に立ちながら、その地域の一つの構成要素である昆虫を見ていく。しかし、地域そのものが衰退していけば、研究対象そのものが消滅し、研究という行為自体ができなくなる可能性もでてくる。まさしく研究者の当事者性が地域とのかかわりにおいて立ち上がってくる側面について考えることができました。

以上、雑駁な感想を述べさせていただいた上で、質問を幾つかさせていただきたいと思います。まず中村先生にですが、働きかけるといふばかりでなく、状況を受けとめた上でいろいろ次を考えていく、課題を考えていくという態度は、昆虫の生態学という学問自体に含まれているのでしょうか。もう少し言いますと、受け身になっているいろいろ対処を考え、かかわりを持っていくという側面が自然科学にどういう形で内在しているのかについてお聞かせいただければと思います。

次に、栗原先生にですが、私も実は仲野先生と同様のことを考えていました。他者の声に応答するというお話についてです。他者の声に応答するためには他者の声に出会うこと、あるいは他者からそういうものとして呼びかけられることが段階としては必要なのではないかと思うのですが、現実にはそれを妨げる要因や装置があらこちらに存在しているような気がします。その結果、見えない地域、見たくない地域、見えなくさせられている地域といった問題が生じているということは

ないでしょうか。そして、そこには先ほどのお話の中でもありました社会的排除ということがまさしくかかっていると思うのですが、そのあたりのことについてお考えを聞かせていただければと思います。

もう一つは、共助、共生ということについてです。共助、共生の実践の中には、かかわる人々の立場性の違いや当事者性のずれに起因するさまざまな葛藤や痛みの経験が当然含まれるものだと思います。そこで、この葛藤や痛みの部分を共助あるいは共生という言葉にどのように含んでお考えになっているのかということをお聞かせいただければと思います。以上です。

■家中 どうもありがとうございました。それでは永松先生、お願いします。

■永松 地域環境学科の永松と申します。うちの学部は文理融合の学部で、パネリストの中では私が自然科学の面からコメントをしてくれということだと思いますので、今までのお話に比べると非常に即物的なことしか言えないのですけれども、主に中村先生のお話を中心にコメントと質問をしたいと思います。

大学がなすべきことと学生の関心／特別なことのない普通の地域で

中村先生のお話ですけれども、私の専門は植物生態学で、とくに森林とか植生とかについて研究しておりまして、非常にずっと話が落ちてくるといいますか、共感できることが多いお話でした。たくさんの有用なお話を伺ったのですが、まず全体として私自身の研究者としてのロールモデルといえますか、そういうものとして非常に勉強をさせていただいたと思います。

主に4点コメントをしたいのですが、まず一つ目は、研究的な話題、里山の件についてです。中村先生は泥臭い労力のかかるお仕事をされていると昆虫のことでおっしゃいましたけれども、私は植物ですが、同じように野外に出て泥臭いことやっておりますので、非常に共感できる場所があります。そういう中で、里山の荒廃とか変化については危機感を共有できる場所があると思います。里山イニシアティブのお話では、私は植生をやっていますしSGA(里山・里海サブグローバル・アセスメント)の件は関係があったのですけれども、時期的に私がこちらに動いたばかりということがあって、力不足で目立った貢献ができず、申しわけないなどお話を聞きながら反省をしました。クマが大学にも出てくるというお話で、うちの大学はタヌキぐらいはいるのですが、クマはさすがに出てこないのですけれども、非常に自然が豊かという意味ではクマが普通にすめるような先進国というのはなかなかないわけですから、それは逆に誇りに思っていることだろうと思います。シカとかイノシシとかサルとか、そういう鳥獣害というのは石川に限らず鳥取でも問題になっていて、同様にいいますか、森林がぼろぼろになっているというのは鳥取でも起こっていることです。

それは基本的にはやはり、里山の利用放棄ということが大きくて、奥山と里山の間のパツファといえますか、区別ができなくなっているということがあり、それには確かに人間がかかっています。しかし森林の関係だと、石川もそうだと思うのですけれども、日本海側は共通してナラ枯れ、カシノナガキクイムシが木に入って、ミズナラとかコナラを枯らす問題が大きくなっておりまして、地域学は、人との関係ももちろん重要なのですけれども、一歩引いて、地域の自然をどうするかというだけでもたくさん問題はあつたということをお返しました。

二つ目として、里山あるいは中山間地、過疎地といえますか、そういうところで何を目的に大学として研究をするか、地域貢献をするかというところで、やっぱり人材養成だろうというところは非常に私も強く同意するところです。里山というのは長年持続的に維持されてきたと普通解説され

ているのですけれども、中村先生のスライドでは、「(とされている)」と括弧がついているのを見逃しませんでした。私も同様に思っておりまして、そんなに持続可能な社会ではなかった可能性があると思います。むしろ現代というのは、その里山を利用放棄して、それから回復してきて一番いい姿を見ている可能性があるのではないかと。昔の里山はそんなにいい場所だったのかなと疑問に思っていて、それは自分の研究の中で何とかしたいと思っています。それはそれとして、里山を維持する、またはこれからもうまく管理していくためには新たなシステムが必要だろうということで、そのために何が必要かという知恵を出さなければいけないのですが、人材養成というところ、やはりそこに行き着くのではないかとというのは非常に共感するところです。

補助金をつけてイベントやっても全然だめではないかというお話については、入り口としてイベントで交流人口がふえるということは、例えば鳥取においては非常に重要なことかなと思って、そういうこともやっています。その上で、最終的にはやっぱり人材養成だろうということは思います。多分正解がないと思いますので、イベントなり人材養成なりいろんなところでそういう努力を続けていくことが過疎地といいますか、そういうところを活性化していくことにつながると考えています。

具体的なプロジェクトを動かすということが非常に大事だろうと思います。鳥取大学では既に持続的過疎社会形成プロジェクト、これは既に人口が少なくなってしまった場所でも持続可能な社会を維持する方法を考えましょうというものですが、これが工学部を中心になってもう既に全学で動いております。その中でも人材養成が言われておりますし、地域学部でもそういう人材養成につながるような教育研究プロジェクトというのを今立ち上げようとしている、立ち上がっているところです。やはり地域との連携も大事ですが、まず大学の中、学部の中の人材をいかに有効利用するか、どうやって結集するかということが大事だろうと考えています。

三つ目としては、そういうことを進める中で課題があるわけですが、先ほど中村先生が学生の関心が低いということを言われまして、それは非常に我々も感じていることです。我々としてはいろんなものをたくさん用意しているつもりなのですが、なかなか学生がそれに食いついてきてくれないということがあります。一つ思っているのは、それはある程度、学生の自覚の問題というか経験というか、そういうものが必要なだろうなということです。とにかく地域に連れていく、中山間地に連れていくということはあるのですけれども、学部だけではやはり短くて、大学院とか、もしかしたらドクターまで進むような学生を育てていかないと、なかなか促成栽培ということではできないのかなと思います。

それから心強かったのは、能登で人材養成をするけれども、サイエンティフィックなバックグラウンドが非常に重要だという中村先生のお話です。我々もそう考えて行動しておりますので、力強い応援を得たと考えています。

鳥取大学でも鳥取県の一番西側にある中国山地の山間地、日南町でやはり廃校になった小学校を借りまして大学の拠点として利用しています。これをどう活用するかという点で、能登の里山里海自然学校というのは、非常に重要な参考事例にさせていただきたいと思いますし、そこに博士号を持っていらっしゃる研究者の方を送り込む、アクティブな方を送り込むというのが鍵かなと感じました。

最後四つ目ですが、大学が何をすべきかということで、先ほども申しましたけれども、学術研究も一緒にそこで進める、相乗効果をあげる、そういうことが大事だなと思いました。私も生態学会に参加していますが、そこで生物多様性を維持する研究発表をするだけでなく、その地域自体が消

滅してしまうのではないかという議論や解決のための行動につなげていくべきだというお考えにも共感します。それは研究者の社会的責任と言われるものだろうと考えます。皆さんそういうふうにご考えていらっしゃると思うのですが、自分がどう貢献できるだろうかという点で、金沢大学中村先生の取り組みというのは、それを実践されている貴重な例なのではないかなと思います。

最初に安藤先生から紹介がありましたけれども、我々も地域のキーパーソンを養成したいと考えてきたわけですが、外部評価でも言われたとおり、この点には課題が残っています。やはり1人の学生に対して長い時間をかけて教育といいますか、いろいろ取り組んでいかないといけないのかなと感じました。

最後に質問です。ドクターの学生や博士号を取っている人たち、ポスドクの方々を送り込んでいくというのが一つの答えなのかなとは思ったのですが、学生の関心が低いということで、これを高めるような何かうまい手はないでしょうかという質問をさせていただきたいと思います。地域創造学類という専攻をつくられたわけですが、そちらの学生さんは、そういう意識が高いかということをお伺いしたいと考えました。

それから、組織をちゃんとつくられて、地域だけではなくて教育研究プロジェクトとしても発展可能なものをつくっていくというのは課題だと思うのですが、その中で一番苦労されていることは何だろうか、どうやったら力が結集できるだろうかという点をお伺いできればと思いました。

栗原先生のお話は、中村先生の目に見えるものに対して、見えない部分についてのお話でして、なかなか私が苦手な部分なので、コメントが難しかったのですが、「生きにくさ」ということが軸かなとは思って、そういう視点が非常に新鮮に感じました。どう生きるかとか、共生的な生き方をどう実現するか、生き方を広げていくという視点は、私自身ではなかなか説明できないのですが、これをどう地域の課題解決と結びつけるかなという点について思いを巡らせました。原発とか、それから公害病とか、そういう視点というのは、私にも割とわかりやすい視点だったのですが、そういう特別な事情のない、「普通の」と言うところによろしくないですけども、そういう地域ではどうという視点から「生きにくさ」とか共生ということに、どういう側面から迫っていったらいいかなということについてヒントをいただければと思いました。

中央から見ての東北という話をいただいたのですが、それぞれの地域というのは、自然が持っている風土というものがあると思います。その地域性とといいますか、風土というものと人間の「生きにくさ」とか、そういうものは、例えば関係するだろうかということをお伺いしました。そういうことについて、少し示唆をいただければありがたいと思っております。ありがとうございます。

■家中 ありがとうございます。それでは、最後に柳原先生からお願いします。

■柳原 今回来ていただくということで資料を読んだり、文献を読んだりしたのですが、直接こうやってお話を伺うと、やはり伝わってくるものというのは、ずいぶん違うものだなと思いました。もともと、とても関心を持っておりましたので、お二人のお話から非常に多くのことを学ぶことができたと思います。

地域にかかわることでの感性の変化／「気づき」のあり方・働きかけられる存在として

その上で、少し質問なのですが、まず中村先生ですが、なぜ今地域なのかというところで、日本の現在の停滞の状況、日本だけではないのですが、自信を失ったような状態への対策を考えるとき、里山里海研究ということはとても意味を持つのではないかとおっしゃったように思います。直観的に私もそういう気はするのですが、生態学ということで、実際にずっとそういうところに入

って研究してこられたわけですし、さきほど紹介されたようなお仕事もされていますので、里山里海と言われるようなところと深くかかわってこられたのですが、そういう世界にかかわることで、先生御自身の感覚といいますか、感性といいますか、あるいは世界をとらえるのとらえ方といいますか、そういうものに何か変化が起こったのか、一つお聞きしたいところです。

それから、里山が人口減少によって壊れていく、自然に戻っていくというのが、非常に大きな問題だということで、やはり人が里山に入っていきような形をつくりたいということですが、なかなかうまくいかないということは、そのとおりだと思います。そこで疑問に思ったといいますか、お聞きしたいのは、里山に人が入っていく、人がかかわっていくということは、里山の人たちにとって意味のあることだとは思いますが、都市の人にとってみても、とても大きな意味があるのではないかなという気がします。最初の質問ともかぶるのですが、そういうふうに見ると、人口はなかなかふえないかもしれないけれども、別な効果というのものもあるのかなと思いました。

それから、栗原先生の方ですが、やはりすごく地域学に近いといいますか、参考になる点が多々あったと思います。一つお聞きしたいのは、「命とは他者の声に応答して立ち上がり」という文章にとっても関心を持ったのですが、人間像といいますか、人間そのものをどうとらえるのかという部分でお聞きしたいことがあります。というのは、地域学を考えていくときに、ある程度自覚があったり、かなり強い意識、認識を持っておられる方も大事ですが、あまり関心がなかったり、ゆったりと生活をしている人たちの場合、すぐには物事を最終的に政治的に考えてみるということに行きにくいかなという気がします。自分以外のことにあまり関心がないという状況も結構言われていると思いますので、地域学を構想するとき、どちらかというところそういう人たちを前提にして考えてみたのです。先生も翻訳の中でされていますが、『地域学入門』のなかで「気づき」を強調しているのは、そういう自分の置かれた位置とか状況をなかなか正確につかめなかったり、そのこと自体にあまり関心がない人も自分で「気づき」を持ちながら生きていくようになるには、どうしたらいいのかという問題意識がありました。それで、地域学を考えるときに、そういうところから組み立てていこうと思ったわけです。ボランティアな生き方というのは自発性だとか、あるいは自分の意思を持って、あるいは自分の言葉で語るというところに重要な点があるように思うのですが、私が地域学を構想するとき考えたのとは少し違って、ちょっと強い感じの、しっかりした人のことかなというイメージもありましたので、ここの辺の関係をお聞かせ願えればと思います。

それから、同じようなことではあるのですが、人のとらえ方としては、例えば今年地域学総説に来ていただいたのですが、内山節さんの書かれたものを読んでみますと、内山さんの場合、自然との関係でいいますと、人間が自然に働きかけるというのは、すぐに私たちも思うのですが、同時に自然から働きかけられる、あるいは、いろんな意味で他者から働きかける存在であるという、そういうところから考えておられる気がしますので、そういうお考えについてはどうかと思いました。

それから、地域学についてコメントいただいたところで、つながりの実現を空間的枠組みを通して考えるということに触れられて、もう一つ、時間軸上のつながりと共生もあるのではないかなという御指摘をいただいたのですが、これについては、確かにこの本を書いたときに、十分に詰めていなかったものですから、あまり書けていないのですが、今年地域学総説は、この問題を一つの大きなテーマとして取り上げてみまして、何とかその辺を掘り下げることができたのではないかなと思っています。以上です。

■家中 どうもありがとうございました。そしたら、今、4人の学部の教員、地域学研究会の会員からコメントと質問があったのですが、それについて中村先生、栗原先生の方からさらに具体的に

お話をいただきたいと思います。では、基調講演の順番で中村先生の方からお願いいたします。

■中村 いろいろとコメント、それから質問をありがとうございました。難しい質問ばかりで、簡単に答えられないのですが、時間もありませんので、なるべく短くと思います。

自分自身の研究と当事者性

まず初めに、どうして当事者性があるのか、言い直しますと、里山里海が、過疎高齢化で壊れてくると、なぜ気になるのかということでしょうか。

ちょっと考えてみましたら、里山里海だけではなく、いくつか気になったことがこれまでの研究生活でありました。その一つは、私がドクター論文のデータを集めるために、20代の後半、京都大学の演習林が京都の山奥のふだん誰も人がいないところにありまして、私はそこに4年間、春から秋まで1人でいたことがあります。そこは由良川の最源流にあるブナの原生林でした。平坦なところで、春から秋までいろいろな花が季節にそって咲き替わってゆく、すばらしいところでしたので、私は調査生活を満喫していました。ところが、ある時そこが伐られるという噂が耳に入って愕然としたことがあります。情報が間違いだったらしく、さいわい、そこは伐られませんでした。ブナ林に住み込んでいて、季節ごとの植物の開花現象を、どっぷりと自然に浸って得難い体験ができました。森が伐採されるという噂を聞いたときは、夜、寝られないぐらい心配になりました。なぜ、そんなに心配したのか、よくわかりませんが、そんなことがありました。

もう一つは、私はインドネシアでずいぶん長く野外調査をしてきました。見事な原生林が、前に行ったときにはあったのに、今度行ったら見渡す限り伐採されていたことが何度かあります。それが、やっぱり非常にショックでした。そのころ、人類学をやっている友人に、君は一生懸命、熱帯の昆虫の生態を調べているが、熱帯林はもうすぐなくなるよ。熱帯林がなくなったらあなたはどうするのと聞かれたことがあります。そんなに簡単に熱帯林が全部なくなるとは思えませんが、それは基本的な問いかけだと思います。それまでであったすばらしい自然（原生自然だけではなく、里山などの2次自然でも）が急になくなったりすれば、それに関与をしていた者は、大きなショックを受けて、考えこまざるを得ないと思います。私自身はそうでした。

ですから、能登へ行ったときも一番初めには、すばらしい光景だと思ったのです。集落のたたずまい、里山と里海もすごいと思います。しかし、よく見ていくと、過疎高齢化によってどんどん壊れているのです。間違いなく、確実に壊れつつあるわけです。それをどう感じるのか。私は大変残念だと思います。そういう感覚がすごくあります。なぜ、そう感じるのか？説明は簡単ではないかもしれませんが。

これまでの、野外調査の際の私のモットーは、できるだけすばらしい環境のところで調査したいということです。すばらしい自然のなかで、あるいはすばらしい集落があるところで調査したいとずっと思ってきました。すばらしいところが、壊れてしまうことは、本当に残念です。

受動性をどう捉えるか

それからもう一つ、受動性といいますか、自分からはできないことばかりです。私は、里山や農業の話をしまいしたが、実は私自身は農業の本当の中身、農家の苦勞、農協の仕組み、お米の価格などについてはほとんどなにも知りません。しかし、チームの代表者ですから、いろんなところで総論的な話はしています。さきほど、ちょっとだけ言いましたが、農家や農業団体に、里山マイスター支援ネットワークをつくってもらい、時々能登学舎に来てもらって、就農希望の受講生の発表

にコメントをもらったり、受講生の農家聞き取り調査の対象になってもらっています。聞き取り調査では、農家の農業経営についての詳しい情報をもらいます。その報告会を聞いていますと、私が知らなかったことがどんどん出てきます。農家の収入、家族、従業員などの個人情報が出てしまいます。しかし、どの農家も自分たちのことを聞き取り対象にしてもらって本当にうれしいと言います。里山マイスターのスタッフ、受講生との連帯感があるからでしょうか。報告会での受講生と農家の方のやりとりを聞きくことが、私にはものすごく勉強になります。また、県が主催する農家研修会とか意見交換会などにもできる限り出るようにしています。そこでは生の現実を垣間見ることができます。そういう会では農家の方は特定の方を除いてほとんどしゃべりません。おじいさんばかりです。しかし、そこで見えるいろいろな動きは、実に刺激的です。それが過疎高齢化という言葉でなくて、それが本当にどう起こって、みんながどう思っているかを、実感し、中身をチョットだけでも体験し、知ることができます。いろいろな問題をどう調整できるかを考えること。生物多様性の研究をどう環境配慮型の農業に結びつけるかの工夫がなければ、農家には全く使ってもらえないと思います。農家は非常に断片的なデータであっても、私たちの調査にもものすごく興味を持っており、もっとデータを集めてくれといわれます。いま目の前で起こっていることを、それは見えないことばかりですが、見ようとするのが大事ではないでしょうか。

里山研究・過疎高齢化問題をつうじた自然科学と人文社会学のリンク

次は自然科学と人文社会学は違うのではないかという大きな質問です。私は、生態学をやっています。自然や生態系というと、これまでは人手の入っていない原生自然（1次自然）が重視され、人手が入った2次的自然は軽視されがちでした。本当の原生自然は地球上にもうほとんど残っていません。それでも熱帯や温帯の原生林とかに話題が集中していました。しかし今、地球で一番大事なものは人手が入って管理されている自然、あるいは攪乱されている2次的自然なのです。うまく管理されている自然もあるし、人によって無茶苦茶になった自然もあります。熱帯でも温帯でも、人が自然を壊してしまったところは、たくさんありますが、一般に自然は、ある程度までの人による攪乱なら、復元力を持っています。日本の里山と里海は、基本的には、自然と調和した人間活動によりできた2次的自然であり、持続的に利用されてきたと言われていています（過大評価かもしれませんが、データに基づいた再検討が必要です）。人間が自然に与えたインパクトが、どのように自然を変え、それが人間社会にどうはね返ってくるか。長期的なモニタリングや実験研究が必要です。たとえば、熱帯林を大面積で伐採すると地球全体の気候や人間社会に様々なインパクトがあります。人間の関与の仕方と受ける影響評価が大事で、それは人文社会学の関与なしには理解できません。文理がうまく提携すれば、ただ単に多様性や変化を記載したり、局所的なメカニズムを解明するだけではなく、次にどうすればいいかという、未来設計についていろんな提案ができます。

そういう意味で、能登半島だけに限定せずに、能登半島をモデルとした総合研究へと発展させたいと思っています。京都にある総合地球学研究所へ、過疎高齢化からの地域再生モデルづくりを課題とした連携研究を申請中です。これまでの能登半島での金沢大学の蓄積を基盤としています。

先ほど永松先生から、鳥取大学でもいろんな形でプロジェクトをされていると聞きました。私たちの能登半島と鳥取県の里山里海の比較研究を連携させられないでしょうか。どちらにも、里山と里海があり、過疎高齢化の問題も共通です。こちらにはすでに地域学部があり、一生懸命考えておられる方がたくさんいらっしゃいます。私は金沢大学は遅れていると思っていまして、地域創造学類という名前はあっても、実際は以前と中身があまり変わっていないような気がします。学類の名前

にだまされて受験した学生がいっぱいいるようですが、入学して1、2年すると、実態がわかってしまうようです。制度が学生にとって不便だとも聞きます。いずれにしても、鳥取大学、それから島根大学にもいろんな方いらっしゃると思うので、金沢大学や北陸の大学との連合体をつくれませんか。時々、勉強会や交流会をしたり、声をかけあいましょう。さっきの地球研の話も含めて、ぜひ一緒にやりたいと思っています。

学生の関心／学生が置かれている状況

学生の関心を高めるために、どうしたらいいか。私は今64歳で典型的な団塊の世代です。私たちは幸運な世代でした。日本が上り坂のときに学生であって、学生時代の騒動も大したことにならず、ここまで来てしまいました。人数が多く、迷惑をかけているとよく言われますが、いずれにしても、日本は上り坂だったのです。子どもの時には、日本がまだ金持ちになる前でしたが、ものすごく貧乏でもなかったのです。

ところが今の学生は、いい目を全然してないです。非常に暗いときに大学へ入って、暗いままで、出たらもっと暗いかもしれないという、私たちの世代と全然違うところに学生たちの意識があるのかもしれない。最近まで、そんなことに気づきませんでした。学生達にアンケートをとってみると、ほとんどが未来は悪くないと思っています。しかし、アンケートでそう書いているだけであって、本当の思いは、違うのかもしれない。

金沢大学についていいますと、非常に立地の不便な大学です。大きなキャンパスがあつて、大きな里山ゾーンがありますが、学生にとっては最悪の場所です。町から近いが、キャンパスまで歩くには、一本道しかなく、雪も降ります。私は、学生たちが自分たちの歩いている両側にある里山を呪っていると思います。この山がなくて、商店街だったらどんなにいいだろう。この不便さが深刻ですが、大学は学生に、勉強しろと言うばかりです。学生に本気でいろいろさせようと思ったら、学生に対するキャンパスのアメニティを高め、学生たちに本当に里山ゾーンをはじめとする角間キャンパスの自然環境がいいと感じさせなだめです。里山ゾーンに実習で学生を連れて行き、アンケートをとったら、みんなおもしろかったと書きます。しかし、毎日不便な思いをさせられている里山ゾーンには、来てくれないですよ。

プロジェクト推進上の苦勞

プロジェクト運営の一番の苦勞は何ですかという質問。一番ではなしに10番ぐらいあります。まずお金が要ることです。プロジェクトを自前でするために、たくさんのスタッフを雇っています。お金をどうつないでゆくかが一番です。

もう一つは、学内にたくさんの教員がいますが、なかなか参加してもらえないことです。最近、プロジェクトへの参加者が増えつつあります。しかし、さっきの学生と一緒に、教員も現在の体制に痛めつけられています。昔と違って評価や会議、めんどくさい書類等がたくさんあります。私も学長補佐をやっていますから、その片割れかもしれませんが、教員がものすごく痛めつけられています。事務職はもっとひどいと思います。その辺を変えないと、みんな伸び伸びできないと思います。

もう一つだけ言いますと、私たちのプロジェクトにはすばらしい若手スタッフがいます。しかし、かれらが研究者としてステップアップしていこうと思うと、論文を書かなければいけません。論文がないと、専任ポストを得られません(金沢大学であろうと外部であろうと)。私はたくさんのポス

ドクを雇っておりますが、みんな期限付きです。ところが地域の方は知らないのですね。プロジェクトが済んだら、金沢大学に帰ると思っているのです。私は、そんなことありませんよと、いつもいっています。皆さんが支えてくれなかったら、もう来春には、みんな失業しますよと。皆さん、何とかしてくださいと言うのです。いずれにしても、スタッフをどうステップアップしてゆくかです。その可能性がないプロジェクトなら、長期的には、いい人材が集まってこないでしょう。スタッフも、やり出したら地域がおもしろくなるのです。だから、なかなか勉強しなくなってしまうのです。(笑声) 狭い意味の勉強ですが。

そんなこともあって、鳥取大学や島根大学と一緒に何かがやり始めれば、大学間の行き来もできます。ぜひ交流をお願いしたい。長々しゃべってすみませんでした。

■家中 ありがとうございます。では、栗原先生から、よろしくをお願いします。

■栗原 まず、仲野さんの、見えない他者とどうしたら出会えるかとか、あるいはエッジにどういうふうにして立つのかということだったと思います。

エッジへの立ち方-大本教との出会い

例えば、亀岡と、それから綾部に聖地を持っている大本という新宗教があるのですね。明治の25年に出口なおが開教して始めた宗教です。この宗教は、一言で言えば平和主義なのですが、教えが「立替え立直し」というのですね。つまり、この世の中がすごく生きにくい、それで理不尽なことをいっぱい押しつけられている。この世の中をひっくり返さなければいけない。「立替え立直し」というのが教えの一つです。それからもう一つは、「世界一列」という言い方と、それからもう一つ、「万教同根」という言い方があります。よろずの教えが一つの同じ根から出ているのです。だから、いろんな考え方があるけれども、いろんな思想もあるけれども、もともとは一つの根から出ているのだから、みんな仲よくなければいけないという平和主義の教えなのです。この二つの教えしかない。

この宗教の人たちとかかわっているのですが、それもどこから始まったかといいますと、私の修士論文なのです。修士論文で、私が今まで全く知らなかった大本という宗教と出会って、それで修士論文書くのですが、どんなふうにしてかなと思ったのです。それで振り返ってみれば、こういうことだったと思います。梅棹忠夫さんの『日本探検』という名著がありますが、その中に大本教についての簡単な記述があるのです。それを読んだときに、ひっかかったところが一つあったのです。それは、大本教というのは大正10年と昭和10年、2度大弾圧を受けるのですね。これは、治安維持法違反、それから不敬罪です。天皇制を誹謗するという。誹謗するというより批判していたのですが、そういうところで、大正10年、昭和10年と2度、大弾圧を受けるのですね。それで、開祖たちのお墓にダイナマイト仕掛けられて、そのかけらが飛び散るわけですが、信者たちはそのかけらを集めて塚を築くという、そういうすごい宗教です。

この宗教の信者たちが、昭和10年の弾圧のときにたくさん獄に入れられるのですね。ところが、その監獄の中で転向した人が非常に少なかったという記述がありました。共産党の獄中転向というのはよく知られたことですが、転向がほとんどなかったという記述があって、そこに僕はひっかかったのです。というのは、自分が60年の安保闘争の経験があるのですね。亡くなった権美智子さんなどと腕を組んでデモをすることはたびたびあったのですね。そういう経験があって、しかし60年が終わって言ってみればもとの波風が立たない、何のエッジもない生活に戻るわけですね。その自分をこういうのが転向というのだなと感じたことがありました。そのことを抱えていましたか

ら、つまり安保で何にも動かなかった。むしろ、近代化ということ、それと高度経済成長、そういうことで世の中がどんどん動いていく、そういう中で、自分がうつうつとしているところがあったわけです。だから、転向しなかったという1点に引かれたのです。それで調べてみたら、そういう宗教でした。

それで、とにかく修士論文を書けるかどうか現地に行ってみようというので、亀岡に飛びました。ちょうど『大本七十年史』の編さんが始まっていたときだった。そういう幸運もあったのですけれども、山ほどデータがあって、そこで何日になりますか、ずいぶん長く寝泊まりさせてもらって、毛布を1枚借りて、大本の中でリサーチをやったわけですね。それが大本との出会いです。ところが大本について書こうとすると、これがものすごく矛盾に富んでいる宗教なのです。一枚岩ではないのですよね。平和主義と言ったと思うと、ものすごく極右的な発想があり、国粹主義的な発想あり、アナキズムあり、マルクス主義あり、何だかもうごった煮なのです。出口王仁三郎という人物がいましたが、これもまた煮ても焼いても食えないような人で、なかなかわからない。とにかく、大本の国際行動という、そういうテーマで修士論文書きました。

その後、大学院時代ですけれども、アメリカの大学に留学する機会がありました。大学院で勉強を2年間して、それで戻ったのですが、戻ってから社会学の合理的な組み立てが一方にあって、他方で自分がうまく処理できなかった大本のもやもやが、またひどく気になってきて、それで再び大本へ行くということがあって、その意味ではかなりしつこいのですね。一度関心持ったことに、もう1回首を突っ込んで、若い信者たちとも話をする。昔の大本のことなら僕の方がずっと詳しいのですね。だから若い人たちにレクチャーもやったりして、そういう相互関係が成り立っていました。

その間に大本教の中で、紛争が起こったのですね。それは、大本のもともとがそういう平和主義、「立替え立直し」と「世界一列」「万教同根」、そういう教えでやってきている。そこに、それに全く逆向きの、権力志向の機構がつくられようとしてきたのです。例えば戦後の伊勢湾台風のとき、真っ先に大本が駆けつけるのですよね人々にライフラインの確保をするのです。そこに腰の重い政府がやっとなやまってくるというときになると、さっさと手を引くという、そういう宗教。大本ということの名乗らないで、そういう救済の活動をしていたりするのですね。そういう独特の社会運動をやっていたのですが、その運動をやめるという教団の方針が出るのですね。教団がおかしなことになっていくわけです。三代さんが天皇家の園遊会に出るということがあったりして、そのことをめぐって若い人たちの中に、大本の原点回帰という動きが始まるのです。それを今度は、本部のいわば権力派が追い出すのです。追い出さなければいいのに、それを追い出すわけです。そこで、対立が深まります。私も行きがかり上、異議申し立てをしたグループの人たちとおつき合いをしていって、そういうことがこれでもう何十年になるのでしょうか。そういう人たちの、生きるということに、どういうふうに僕が関係することできるかという。大したこともできないのですけれども、かかわりを持ってきているということなのです。

身体を運ぶ／関心をもってそのほりに立つ

そこはちょっとした気になることがまずあったということですね。さっき中村先生も気になることとおっしゃった。本当にそうだと思います。そこを立ちどまってちょっと調べるということがあって、それで、わからないのですよ、やっぱり。情報でしかないから。そこで、身体を運ぶということ、あるいは現地に行くということ。身体を運ぶというのは、すごく重要ですね。身体を運んだおかげで、大本とはどういう宗教なのという問いに、本当に身体感覚で答えてくれる信者に出会う

のですよね。母親が幼子に添い寝をして、その幼子の成長をゆっくりと時間をかけて見守っていくという、そういうような宗教と聞いたのですね。本当に僕は、亀岡、綾部という聖地で感じた感覚というのは、まさにそういうものですね。そういう宗教に、ある意味でほれ込んだのですね。

私は人にほれ込んだのです。だから、次の世代を担うような、教主補たちと、若い人たちの集まりと、ずっとつき合いをしていくと、そういう中で、同じような問題に気づきが出てくるのですね。だから、沖縄ということに気づきが出てきた。沖縄に飛んで、水俣と沖縄、連帯ということ、小さいけれどもやろうとしたり、そういうことを大本がやるのですよね。

ですから、身体を運ぶということ、関心を持ってそのほとりに立つということ、そういうことで、そこにおのずと出会いがあり、エッジに立つということも出てきたってことです。だから最初は本当に偶然なのですね。梅棹忠夫の『日本探検』をたまたま寝っ転がって読んでいたというだけで、そういうことが始まったのですね。

立場の違い・葛藤・痛みと共生・共助

あと児島さんが言われたことは、これはやはり大きな問題です。立場の違いがあって、それで葛藤や痛みが、そういう集団の内部にあるのではないか。それをどういうふうにして共生とか、あるいは共助という関係に持っていけるかという。これは実際にあったことを思い浮かべるといいと思うのですね。例えば釜ヶ崎です。

釜ヶ崎は、ドヤ業者と労働組合というのが、水と油みたいに合わないのですよね、対立しているのです。この両者が一緒に仕事をするということは考えられない。しかし、これが一緒に仕事を始めるのですね。なぜかといいますと、最初は、ホームレスをどうするのという、ホームレス対策というところでやっていると、労組とドヤの言い分とが、おのずと違ってくるのですよね。しかし、非常に知恵者がいて、地域づくりをやろうと、地域づくりというふう目標を大きくするのですね。そういう中に、そういうホームレスをどういうふうにするのかという話をに入れていく。そうなったら、やっぱり地域づくりということでは、例えば子供にとってあまり環境がよくないのではないかということもある、子供にとって住みよい環境はどういうものかということをもみんなで一緒に考えるという姿勢になったときに、これが突破できるのです。これは多分目標を大きくするというところだろーと思えます。

それからもう一つは、論理の組み立てを変えるというのは大きいことですね。例えば反原発。反原発といたって、これも一色ではないわけですね。反原発の中に例えば、放射能を浴びると奇形が生まれるという言い方があります。だから反対という。それに対して、これは優生思想ではないのという立場から、そうすると反原発の論理の組み立てです。これは化学洗剤の使用をめぐっても、やっぱり同じようなことありました。奇形が生まれるのではないのという、だから反対という、そういう論理に対して、実際にそういうお母さんたちの集会で、奇形の人、障害の人から、では僕たちは生まれなければよかったのかというのが出てきて、母親たちが洗剤追放という、その論理の組み立てを変えていくのです。そういうことで、初めて共同で仕事ができるということになっていくのです。

異交通—フィジカルなものへの介在

そこには、こういう論理の組み立てを変えるということとともに、「異交通」ということが大切になってくると思えます。これは同じコードを持たない者同士が、どうやって異交通できるか。多分

にそこに両方の身体がないとだめですね。やっぱり、ここにも身体が介在する。フィジカルなものが介在する。それがメデュームになって、異交通が成立するのですね。例えば、アメリカの先住民が沖縄に来て、それで反基地闘争をやっている沖縄の住民たちと交流をするということがあります。そういうときに、どうやって交通するのだろうか、確かに英語を使ったり英語の翻訳をしたりという、そういう言葉の上でのやりとりはできるのですが、実際にそこに人が身体を運んで、それで贈り物をあげる。その贈り物に対して、お返しをします。そういう交換の中で、通い合うものが出てくるのですね。それが励ましになるわけでしょう。そういう、異交通をすること、やっぱりそれもフィジカルな交通なのですよ。そういうことが、葛藤とか対立とか、そういうものを超えるということになるのではないのでしょうか。

それから、生きにくさということ。これは永松さんが言われたと思いますが、生きにくさというものを感ぜないということはあるのですよね。ただ、それは大変いいことだと思うのです。それで幸福であれば、何も言うことはないと思うのです。しかし、さっき中村さんも言われましたが、ゼミの学生に一人一人の問題を聞くということがあったり、あるいは何かのときに、やっぱりぼろりと出てくるのですよね。それで、みんな問題を抱えています。問題を抱えていない学生は1人もいませんね。例えば親友が自殺してしまったとか、それから家族の事情を話す子もいるし、自分が実は虐待されていたと言ったり、聞けば問題を持っていない人はいない。そういう人たちのすべてにかかわることはできない。でも、友達がやっぱりそこを救っていくのですよね。友達がその子のほとりに立つということ。そのことで救われていく子はいるのです。ということつまり、ゼミで友人が生まれるように、そういうゼミをつくっていけばいいわけですよ。だから、そうすると、達成主義的にゼミをつくっていくと、成績評価とかそういうことにすぐ結びつけるような、学生を序列化するような、そんなことをやっていたら、とても友人はできないわけです。だから、こっちが手抜きをするわけではないのですが、学生が学生同士で、友情を深めるというか、出会いができるように、そういうことをつくることはすごく大事だと今、私は思っています。

働きかけられる存在として／積極的な受動性―「のさり」

それから、柳原さんが言われた中で、やはり自然に働きかけられる側面というのがあるのではないのかと。人間がボランティアに生きるときに、自然に働きかける、人間に働きかける、そういうことばかりではなくて、自然や人間に働きかけられる側面というのがあると、これは本当にそうだと思います。それから、児島さんが積極的な受動性と言われたのですけれども、そのこととも関係ありますね。

先ほど中村先生と話していたのですが、水俣に「のさり」という言葉があるのです。これは水俣の漁師が日常語で使っている言葉です。「のさり」と平仮名で書くしかないのですが、この「のさり」というのは、向こうからやってくるものなのです。贈り物なのですね。賜物であり贈り物なのですが、それが結構厄介だったり不幸な贈り物もあるのですよね。だから水俣病を「のさり」と言ったりするのはですよ。向こうからやってくる、避けようがないのですよね、だから受けとめざるを得ない。

でも、こういうことも言うのですよね、水俣病になったおかげで、物事を自分の頭で考えたり、知ったことがあると。例えば人間とは何だろうということは、こんな病気になって初めて考えたよと。近代とは何なのか、そういうことですね。それから猛勉強が始まるわけです。だから水俣病になったおかげで、そういうことも知ることができたと言うのです。

それから、台風は「のさり」というのです。みんな向こうからやってくる、そういう受動性の生き方なのですが、台風やってくると家の瓦が吹っ飛んだりして、結構厄介なものです。でも、漁師にとっては、台風が来ると魚群を連れてくるのですね。だから嵐について船を出すということがあります。それは、両義的な「のさり」なのです。そういう「のさり」で生きているというところがあるのですよ。こういうのが当事者、市民の自然に働きかけられる側面で生きていると、そういう人たちがいるということです。

それに考えてみれば、私たちも実はそうですね。都会で生きていても、そうではないでしょうかね。開発志向で、いつも目をぎんざりんにしている生き方を私たちしているわけではなくて、非常に偶然に、例えば散歩をしていて、そこに、あっ、花が咲いていた、あっ、鳥が鳴いていたと、こんなのはみんな向こうからやってくるものですね。自然から働きかけられるもの。そういう部分で大部分を生きているのではないかなという気がするのです。市場原理ももちろん重要ですけども、その合間合間の、自然とか、人に働きかけられる側面をもっと広げていきたいなと自分では思います。そのくらいでしょう。

■家中 どうもありがとうございました。

さて、もう時間ではあるのですが、フロアの方からご質問やコメントを、1人でも2人でもいただきたいと思います。大学院生がマイクを持っていますので、御発言される方は手を挙げていただければありがたいです。質問の場合は、この壇上にいるどなたにという形で言うだけでいただければと思います。御遠慮なさらず、一言でも構いませんので。

■会場発言A 中村先生に質問です。

里山教育プログラムの目的と効果

私は、地域文化学科の教員で、専門は言語学なのですが、授業を通してまちづくりということにかかわっております。ということで、先生のお話の里山というのを地方都市の中心市街地と読みかえながら伺っておりました。

そういうことを背景にしながら、お伺いしたいのですが、里山にしても、地方都市の中心市街地にしても、昔のように再生するということは、おそらく不可能なことだろうと思います。にもかかわらず里山というところに注目されて、こういう教育プログラムを考えられたのか。さらに言えば、学生はあまり関心がないということでしたけれども、学生に対する教育プログラムではなくて、社会人に向けての教育プログラムとして、こういうものを立ち上げられたのはなぜなのだろうかということ。そして、実際に受講した人たちは、何を求めて、このプログラムに受講し、何を得て修了していった、それが後に、とくにその里山ということとかかわって、どういうふうにかかわっているのだろうかということをお伺いしたいと思います。

■家中 では中村先生、お願いします。

■中村 なぜ里山かですが、里山の占める面積は広いです。一番初めにパワーポイントでお見せしたように、石川県の6-7割ぐらいの面積が里山です。里山は農業や林業による人手の入った二次的な自然です。私たち周りにある里山の状態が重要です。1000年か、それ以上続いている長年の営みがあります。それが日本の文化や精神性をつくってきました。その意味で、里山は非常に大事だと思います。さっきどなたかのコメントがありましたし、私もコメントしましたが、昔は本当に里山が、持続可能であって、ユートピアの世界だったと、言うようなことが言われることがあります。しかし、そんなことはないと思います。昔、農業している方は、背中が曲がったり、草を抜

くために手が曲がったりするぐらい、里山の労働は大変でした。それでも里山は、それなりにずっとうまく維持されてきたと、現在も発展途上国などで見られる大規模な乱開発と比べると、いえるのだと思います。

なぜ、若手の社会人を対象としているのか。大都会には、たくさん若者がおり、その中には能登の里山での生活を希望する人が多数いるに違いないと予想しました。そういう人たちを対象としたプログラムをつくり、声をかけたら受講生をたくさん集められると思っていました。ところが、いろんな原因があるのでしょうか、そう簡単ではありませんでした。それでも大都会から13人が定着して頑張っているところです。

なぜ学生を対象にしないか。大学で学生対象にやろうと思うと、単位を出さねばなりませんから、カリキュラムをきちんと組む必要があります。そうすると、教員をちゃんとそろえて、大学の中の教務システムにのせねばなりません。それはなかなか大変です。そんなにたくさん協力者がいませんし、学生部のシステムは、そんなことに向いていません。しかし、現在は考えをすこし変えました。里山マイスターが、本年度末で完了します。ポストマイスターへと発展させるためには、成果を学内に環流するとともに、学内のシステムを変革するためのチャレンジが必要だと考えており、学内でもいろいろな試みを始めました。一方、部活や同好会のような仕方もあるかもしれませんが、中途半端では、うまくゆかないと思います。

■家中 よろしいでしょうか。

■中村 それから、どんなことを目指しているかですね。

■家中 そうですね。

■中村 私たちは初めから、例えば、環境配慮の〇〇式の自然農法とか、有機農法を指導することはしていません。受講生が、農業などを目指すといいなと思っていますが、農業以外のことで、それぞれの受講生が自分のしたいことを考えてやってゆくシステムです。

なかなかやる事が決まらない受講生が多いのです。とくに1期生、2期生は、能登で何かやりたいというので来たのですが、卒論テーマ、つまり将来計画がなかなか決まらない人が多かったです。3期生、4期生になってくると、いろんな蓄積があるので、そんなにテーマをころころ変えていません。受講生たちが言っているのは、全国からいい先生に来てもらって講義を受けられますが、一番の成果は、里山マイスターのスタッフと知り合いになったり、全国のいろんな方々と知り合いになれたこと(先進地視察など)。それにやっぱり友達です。さっき栗原先生がおっしゃいましたが、割と年代の近い友達ができたこと。私が気づかないところで、友達同士のネットワーク化が進んでいるようです。

■会場発言A ネットワークというところに、非常に私も感動しました。そこがやっぱりポイントになると思いました。

■中村 ええ。

■家中 どうもありがとうございました。

■中村 どうもありがとうございます。

■家中 よろしいですか。では、もう1人お願いします。

■会場発言B 栗原先生にお聞きしたいのですが、「3. 11」で結局、産業と、それから核、いわゆる原子力の問題といったようなことが明らかになったというなかで、それまでも産学複合体とか、そういうものに対して批判的な形が60年代はあったのですが、結局それがそうでなくなって、「3. 11」を迎えたのではないかと思います。で、「3. 11」の後の、やはり地域学といいますか、地域

に対する批判的なとらえ方、こういったものについて、コメントをいただきたいと思います。

■**家中** では、お願いします。

■**栗原** 地域に対する批判的な……。

■**会場発言B** 要するに大学も含めて、どういうスタンスで今後考えていくのかということです。

大学の社会的位置

■**栗原** そうですね。大学の位置というのは、大学ぐるみというより、大学の中で直接、東電から金がおっていると。その補助金とか、それから冠講座で、いろんな形で実際の利益を得ている人たちが絡んでいたということがありますよね。それから、チッソの場合もそうで、水俣病の場合も同じでしたが、そういう学者たちが絡んでいるのですが、この人たちはやはり権力と密接な関係にあるのですよね。そういう人たちが絡んでいて、このリストというのは、ルネッサンス会議というのがあるのですよね。有馬朗人という方を座長にして、ものすごい数、商社とか銀行とか大企業の会長や社長や、そういうものを網羅したリストがあるのです。その中に東大の総長が何代目か、何人かいるのですが、そういうのも含まれていて、だから「3. 11」の前のルネッサンス会議のメンバーといたら、ものすごい数でした。それが、「3. 11」があったら、まだリストは出ているのですよね。でも、ずいぶん人数が減っているのです。旗色が悪いというので引込めた人たちが結構多いのですよね。そういうのを見ていると、大学ぐるみというのでは必ずしもないのですよね。その意味で、大学の中に、そういう利益絡み、権力絡みの方がいてという形になっていると思うのです。だから、地域との関係でいえば、そういう大学全体としてという考え方はもちろんあるけれども、やっぱり個々の実際に、アクティブに地域とかかわっていかれる方が何人かいらっしやるということが大事で、そこからまさにこのネットワークで広がっていくのだと思います。

だから、こういうことは、大学の中では、自分の例えば守備範囲というか、立ち方というのがいろいろあるわけです。例えば環境問題をやっているという人でも、水俣には直接関係ないよと、そのかわり、環境問題ということで、私はこういう理論的にしっかりやっていますみたいな人もいるわけだし、それから水俣病問題で、やっぱり関心を持ってくれる人もいるわけですよね。そういう人たちのさまざまな立場が大学の中にあるので、そういう地域学みたいな形で密接なネットワークができるというのは、すごくいいと思います。しかも、それぞれこの『地域学入門』の記述を見てもわかりますように、全く違うアプローチをしているわけですよね。こういう異なる人たちが、こういうふうに通に、地域のことに関心を持ってネットワークをつくれるというのが一番望ましい形ではないかと思います。ただ、実際に地域とどういう形でかかわることができるか、やっぱり重層的なかかわり方があると思うのですよね。

それともう一つは、やはり地域の当事者です。地域のエッジに立つ人たちがやっぱりいるわけですから、その人たちの自立ということにアシストできるような、そういう立ち方が、私は大学人としてはやはり必要ではないかと思っています。

■**家中** どうもありがとうございました。時間を大変超過したということと、あと議論も、フロアとのディスカッションをたっぷりとおいたはずだったのですが、進行が悪くて申しわけなかったのですが、第2部の方も、このあたりで終了させていただきたいと思います。お二人の講師の方、それから4人のパネリストの方、どうもありがとうございました。(拍手)では、司会にお返しします。

■**福田(司会)** 長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。皆さんも長い間、どう

もありがとうございました。それでは、閉会に当たりまして、藤井正地域学研究会副会長より、御挨拶を申し上げたいと思います。

■藤井 それでは藤井の方から簡単に、最後の御挨拶をさせていただきたいと思います。

閉会挨拶

まず、中村先生、栗原先生、刺激的な、また含蓄のあるお話をまことにありがとうございました。従来の大学や学会の枠にとらわれないお仕事、それはもちろん、先生方の御研究を基礎としたものであるという点も含めて、すごく我々は共感をさせてもらいました。意を強くして、地域学、地域学部という方向性について考えていけるのではないかと考えております。

また、御来場の皆様方、長い間、長時間にわたりまして最後まで御参加いただきまして、本当にありがとうございました。

実は我々地域学部も、先ほど少し話が出ましたが、新しい次のステップアップのプロジェクトを準備しているところであります。それは地域学という学際研究という点はもちろんですが、地域の現場の課題に関する実践研究、それから、それらの研究に基づいて学生教育を地域の中で、地域の方と連携しながら進めることができないかというプロジェクトであります。何度か今のお話でも出てきましたけれども、大学はやっぱりキャンパスの中におさまっていた、システム自体がそういうふうにできているものでもありますので、いろいろとぶつかる点もあるのですが、これからのあり方を考えるために、これを地域の皆さんと共同で、先ほどの栗原先生のお話では経験知というものも考えながら、これからの日本社会の基礎となるような地域の研究、それから地域を支えていく地域の中での人材育成を展開していけたらと考えております。その際に、今日いろいろ御指導いただきましたお話も受けながら、進めていきたいと思っております。

それでは最後に、もう一度、この深い議論と学びの場を御提供いただきました、中村先生、栗原先生に御礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

■福田(司会) 以上をもちまして、第2回地域学研究大会を終了させていただきます。

皆様、本日は本当に長い時間、御参加いただきまして、ありがとうございました。もう暗くなっておりますし、気候も寒くなってきましたので、どうぞお気をつけてお帰りください。また、皆様にぜひともアンケートに答えていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

本日は本当にありがとうございました。(拍手)